

## 【分科会の論点】

### I. 検討過程

### II. 分科会の議論内容

1. 時代感・潮流（なぜ観光教育が求められるのか）
2. 観光教育で育める資質・能力
3. 観光教育の意義・価値
4. 観光教育の普及方策

### 【参考資料】

検討した事項（次年度以降の議論材料）

# I. 検討過程

2020年11月から2021年1月にかけて、「小中」「高校(普通科)」「高校(専門学科)」の3部門に分かれて議論を行った。分科会委員は学校教員を中心とし、現場の生の取組・課題感を抽出・議論した。

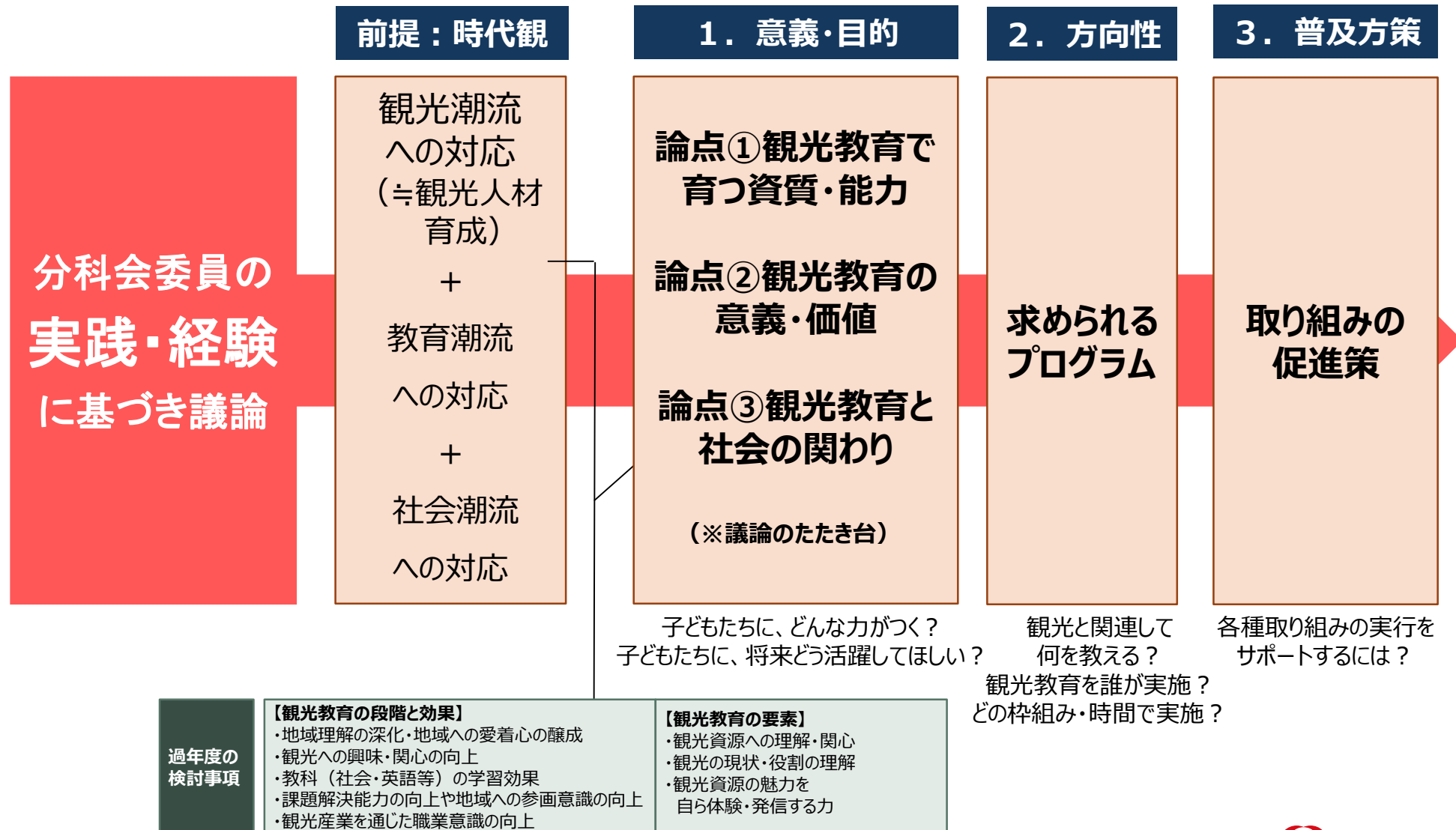
日程	小学校・中学校 部門	高校（普通科）部門	高校（専門学科）部門
	2020/11/24	2020/11/20	2020/11/30
	2020/12/14	2020/12/23	2020/12/18
	2021/1/19		
参加者※	<p>【座長】 寺本 潔 氏</p> <p>【委員】 内川 健 氏 河合 豊明 氏 高清水 英俊 氏 手塚 美和 氏</p> <p>【統括座長】 穴戸 学 氏</p> <p>【オブザーバー・ゲストスピーカー】 新保 元康 氏 (NPO法人 ほっかいどう学推進フォーラム 理事長)</p>	<p>【座長】 村上 和夫 氏</p> <p>【委員】 高嶋 竜平 氏 中村 太悟 氏</p> <p>【統括座長】 穴戸 学 氏</p> <p>【オブザーバー・ゲストスピーカー】 中野 憲 氏 (株式会社JTB 教育事業ソリューションセンター センター長) 原 一樹 氏 (京都外国語大学 教授)</p>	<p>【座長・統括座長】 穴戸 学 氏</p> <p>【委員】 大日方 樹 氏 大屋 泰彦 氏 北村 由美 氏 鈴鹿 剛 氏</p> <p>【オブザーバー・ゲストスピーカー】 鈴木 恵一 氏 (市立札幌啓北商業高等学校 校長) 中谷 知記 氏 (北海道二セコ高等学校 教諭)</p>

※座長・委員の所属は、協議会要綱参照

# I. 検討過程

観光教育で育まれる資質・能力を、学校教員の具体的な取組から帰納的に検証した。  
そして、観光教育の意義・価値や、今後必要とされる具体的な取組みについて検討を行った。

## 分科会における議論の枠組み



# I. 分科会における議論の紹介

## ■ 議論の紹介（小中学校）

- 他者理解、自文化理解だけではなく、世界に目を向けることや、自分が住んでいる地域と他地域を比較することは、自分の成長や地域の活性化のために必要である。
- 狭義の観光産業だけでなく、他産業も日本や地域の観光を支えている。我がまちの独自性を見出し、それがまちに対する肯定感につながれば、子どもたちにとって価値のある観光教育につながる。観光という題材は、主体性を育む学習に適している。
- 小学校では、子どもたちは学びが楽しいと積極的に学ぶため、観光という題材は、主体性を育む学習に適している。グループワークや観光客へのインタビューなど、地域に出かけて様々な学習を行うことの意義・効果は抜群という話が、各種の取り組みから示唆される。
- 中学校では、社会科や理科、国語科、家庭科など、観光教育を扱える教科が多い。加えて、総合的な学習の時間やキャリア教育（中学校では職業体験が入るため“仕事”を学ぶことが重要）において、将来の進路、観光産業の担い手育成につながるような教育が必要である。
- 中学校の修学旅行にある班別行動において、SDGsを取り入れた探求学習が始まっている。「持続可能な観光はどうあるべきか」という課題解決の視点を入れると、観光教育の小中の系統的な学びが実現できるのではないか。

# I. 分科会における議論の紹介

## ■ 議論の紹介（高校・普通科）

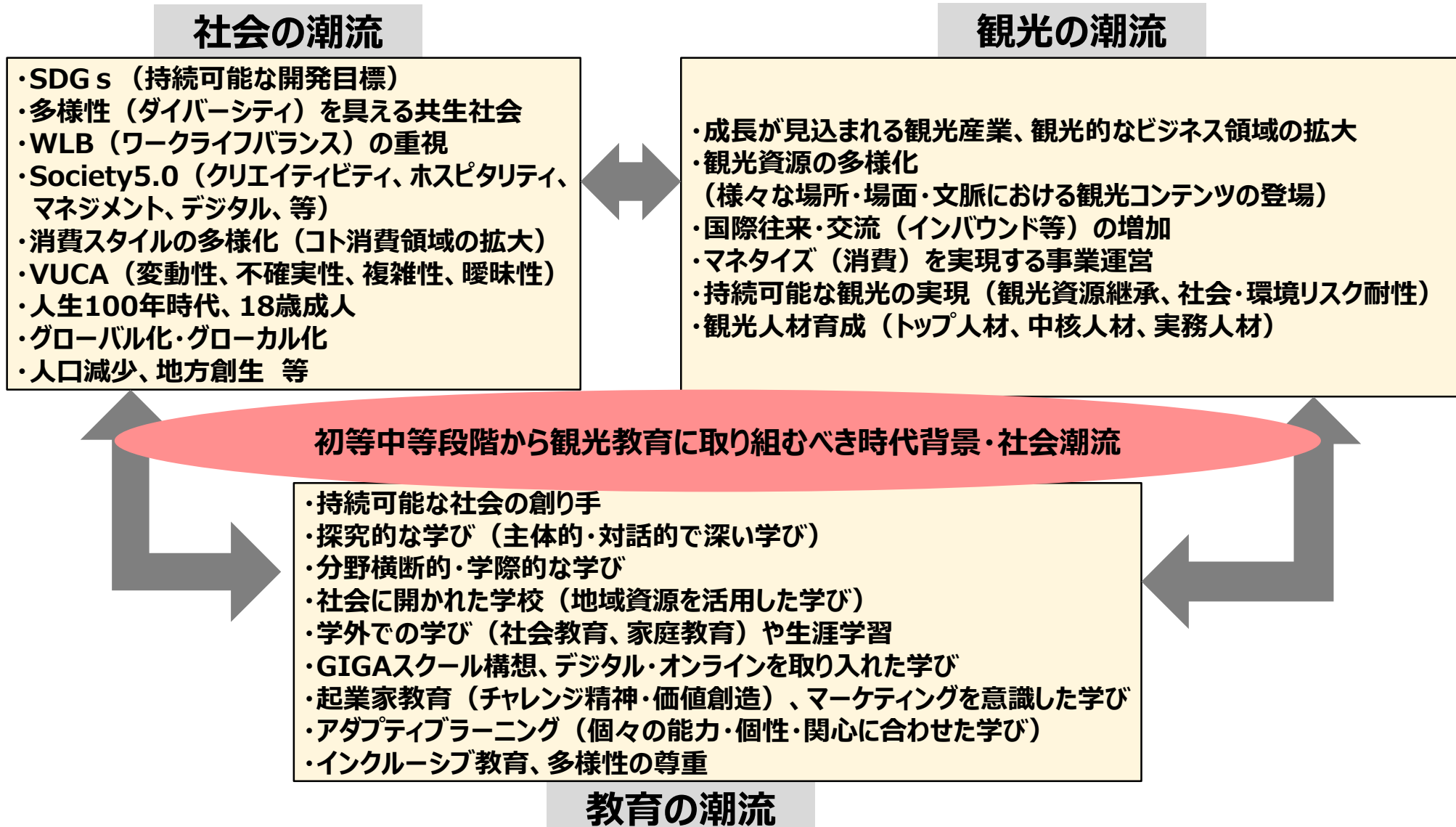
- 高校普通科の生徒は進路が非常に広く、就職もあれば進学もある。生徒は多様な目的をもって学ぶ。観光教育では「旅行の方法の習得し、観光を通じて日々の生活や人生を楽しく豊かに生きる意義を理解する機会とする」同時に「社会との関係の中」「自分との関わりの中」でそれを実現するための問題点や課題を発見して高等教育につなげたり、社会での自分の働き方につなげたりすることが必要である。
- 従来の高校生の学び方が大学と合わず、大学は入学後に苦労している。特に「気づく力」「問いを立てる力」の欠落が大きくその育成が課題である。そこを高校と大学との接合で育成するかを検討する事が課題である。（探究学習や課題研究で、研究テーマが決まらず、議論どころか、問いも出ない）
- 高校における芸術・文化等の教養の醸成は、一部の学校を除き蔑ろにされてきた。これらは、物事に対する洞察力や俯瞰的視野、美意識や品位の向上など生きる姿勢を育むために不可欠な力である。観光教育では、時代を貫く「教養」を育む基礎を自己の内部に据える事と旅行との繋がりの育成が必要である。
- 観光に関わる産業の発展、関連する仕事、社会活動や自己研鑽の機会が、上記の学びから世界には多様に存在する事を学ぶ。その上で、教育を通じて、観光における自らの関わり方とリーダーシップの在り方をグローバルに考える機会を与える。それは、持続可能な社会の形成上で最も大切な学びである。
- 高等学校普通科における観光教育は、広範囲であり、人々との相互関係、観光産業等の既存の社会活動に基礎をおく事から、学校の中に留まる事なく、社会的・国際的な連携において行われる必要があり、産業界や機関等にその教育機会を共創する働きかけを行う必要がある。

# I. 分科会における議論の紹介

## ■ 議論の紹介（高校・専門学科）

- 2022年度新学習指導要領で商業科の中に「観光ビジネス」の科目ができることで、高等学校における観光教育への期待も大きい。なお、現状では、商業は簿記や情報処理の授業を中心とした検定教育に重きが置かれ、現状では観光教育への理解と関心は低い。
- 専門学科で観光教育を議論する際に、商業に関する学科だけでなく、他の専門学科も含めて、幅広く考えるとよい。専門学科において、観光教育をテーマに、横串を刺すこともできる。その場合、商業高校の観光教育を工業、農業、福祉といった他の専門高校にどのように展開していけるのかが課題。
- 授業内容に加え、「教員の研修方法」や、「具体的にどのように教えるのか」の悩みが大きい。
- 専門学科では、地域連携に取り組む学校が多い。実務的な能力やプロデュース力、社会に役立つスキルを、観光を通じて磨き、観光事業や観光の取り組みに貢献してくれる人材を育てたい。他にも、コミュニケーション能力や積極性、協働力、たくましさ等が育まれる。
- 専門高校は学びを実践に展開する機会も多く、地域への関心も高いので、高校生が地域課題に取り組むことで、課題解決する(コーディネートをする)役割ができることもある。そのような能力を身につけ、地域に貢献できるとよい。
- 職業としての観光スキルを修得するとともに、旅行者として観光を楽しむ力を育むことも必要。

## Ⅱ. 分科会議論 1. 時代感・潮流（なぜ観光教育が求められるのか）



## Ⅱ. 分科会議論 2. 観光教育で育める資質・能力

### ■ 観光教育で育める資質・能力（※一例）

小中  
学校

- ・観光の意義について理解を深め、日本及び地域への愛着と誇りを醸成する。
- ・国内外の各地の魅力や独自性に気付く。探究・交流を通じ、魅力の価値化に携わる。

表現力

発信する力

他地域と比較する力

プランニング旅行する力

品位・モラル

コミュニケーション力

コーディネート力・プロデュース力

問題解決や自己理解のための  
気づき力

俯瞰力・客観的に見る力

批判的思考

高校  
(普通科)

データや情報の収集・分析・活用

マルチタスクの力

高校  
(専門学  
科)

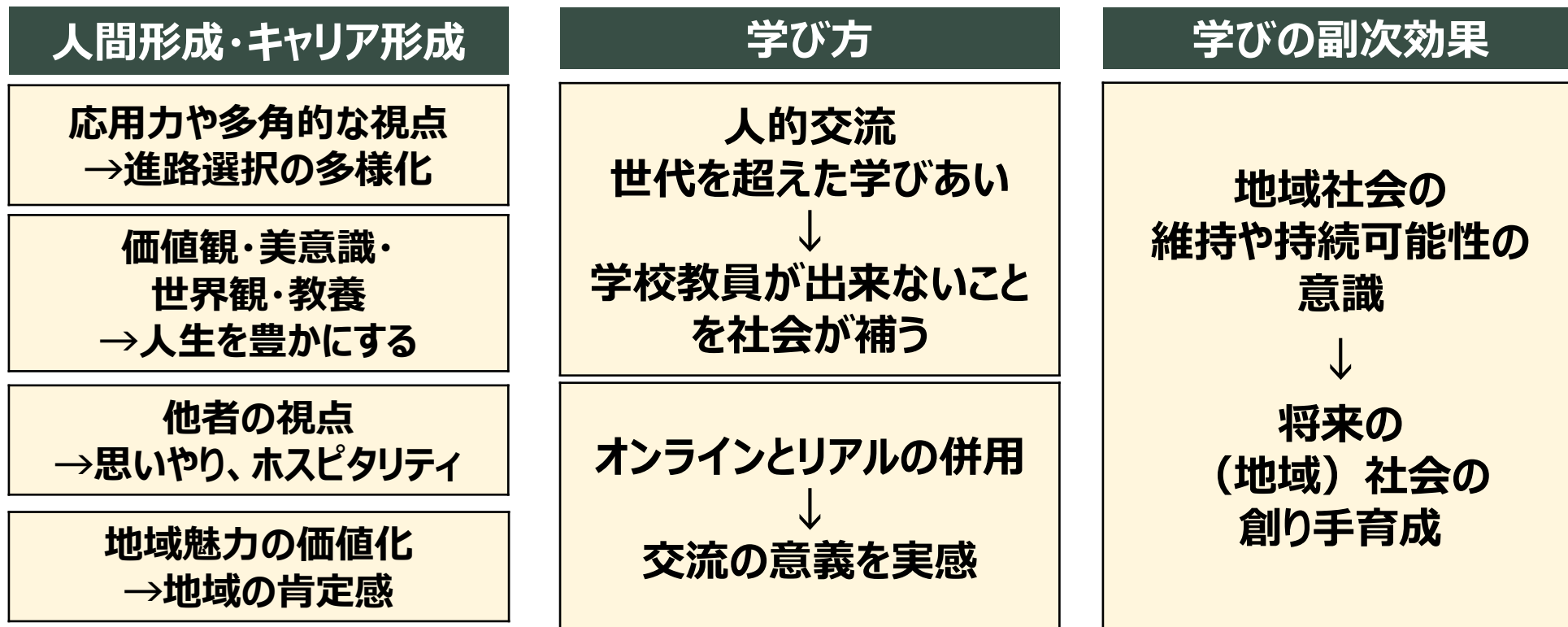
- ・観光を通じて、気づき力、問いを立てる力、解決する力を高める。
- ・観光を通じて、自己の価値観・美意識・教養を育み、人間形成や将来設計につなげる。

- ・プロデュース力や俯瞰力を高める。
- ・観光の基礎能力（魅力の価値化や交流促進に関する理念や方法など）を育む。



## Ⅱ. 分科会議論 3. 観光教育の意義・価値

### ■ 観光教育で学ぶことの「意義・価値」（※一例）



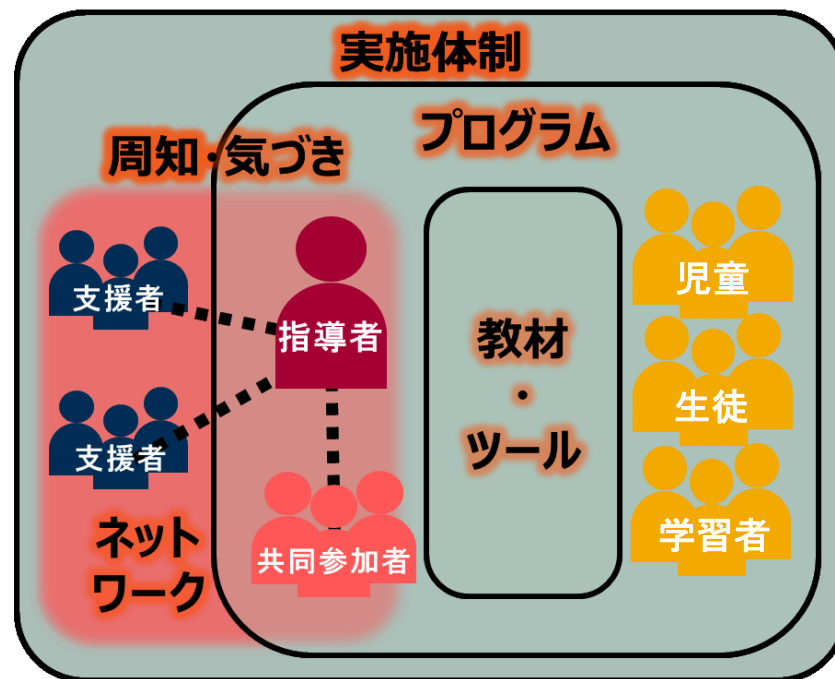
#### <検討の前提・方針>

- ・観光教育が他の教育とどう違うのかを明確にすべき。
- ・初等中等教育では観光推進を支える基礎教育が含まれる。地域理解や観光分野の関心に感知するなど狭い印象にならないよう、教育がもつ意義が観光にも波及する視点を含め、観光庁として初等中等教育における観光教育の意義・目的をどのように打ち出していくか明記すべき。
- ・普通科教育としては、科目特性を活かすより観光の力を利用している側面が強く、そのような軸も必要かもしれない。等

## Ⅱ. 分科会議論 4. 観光教育の普及方策

### ■ 観光教育の普及方策（※一例）

周知・気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光教育の効果を表現</li> <li>・観光教育のプロモーション活動</li> <li>・指導者の養成</li> </ul>
教材・ツールづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学びの運営支援 (副読本、資料、コンテンツ、等)</li> <li>・学びの設計支援 (事例、手引き、指導案、等)</li> </ul>
プログラムづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モデル事例の創出 (尖った取組、普遍的な取組)</li> </ul>
ネットワークづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係者のネットワークづくり</li> <li>・指導者が繋がる場の創出</li> <li>・指導者のレベルアップ</li> </ul>
実施体制の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学ぶフィールドの創出</li> <li>・支援者と繋がる場の創出</li> <li>・イベント・コンクール等の活用</li> <li>・事業同士の連携・連動</li> </ul>



#### <議論の前提>

- ・観光教育の狭い捉え方や、画一的な捉え方を払拭することが必要。
- ・既存の学びの見つめ直しであることや、個別事情に合わせられるというメッセージが必要。

## Ⅱ. 分科会議論 4. 観光教育の普及方策

### ■ 観光教育の普及方策（個別意見の紹介※一例）

<p><b>周知・気づき</b></p>	<p><b>観光や観光教育に関する誤った印象の払拭、等</b>          →観光教育は非常に応用が利く認識を、先生方に知ってもらうことが重要。          →既に先生方が取り組んでいる内容と類似したものが多く存在。それらの見直しという形が受け入れやすい。          →SDGsやICTの視点を含めると、新しい教育テーマとして実施動機のある層に観光教育を浸透させられる。</p>
<p><b>教材・ツールづくり</b></p>	<p><b>学びの運営支援</b>          →副読本の作成、観光教育向けの資料・コンテンツ整備、GIGAスクールに対応した学習コンテンツ、等  <b>学びの設計支援</b>          →実践者の事例や指導案の情報共有、学習づくりのための手引きや参考情報の整備、等)</p>
<p><b>プログラムづくり</b></p>	<p><b>各教科の学習における観光教育の実現</b> → 例：各教科で観光教育に使えるものを抽出・プログラム化。  <b>修学旅行や遠足などの捉えなおし</b> → 例：SDGsと絡めた修学旅行の実施。  <b>縦・横の連携や連動を確立</b> → 例：観光関連産業と教育界の連携が必要。</p>
<p><b>ネットワークづくり</b></p>	<p><b>指導側の体制・ネットワーク</b>          →プラットフォーム整備・モデル校（事例共有・意見交換・教えあいの場、地域関係者と繋る仕組み、等）  <b>学び手の体制・ネットワーク</b>          →観光を学ぶ仲間が集まる機会の創出</p>
<p><b>実施体制の整備</b></p>	<p><b>全体的な動き（グランドデザイン）を描く</b> → 例：社会動向も鑑みた、推進計画を設定  <b>指導者の活動インセンティブ創出</b> → 例：観光教育が、進学時・就職時にPRできる仕組みづくり  <b>活動資源の確保、他事業との連動</b> → 例：観光協会や観光課、教育委員会、他省庁事業との連携</p>

## Ⅱ. 分科会議論 4. 観光教育の普及方策（参考：実施時に意識したいプログラム要件）

### ■ 観光教育の実施時に意識したい「プログラム要件（※一例）」

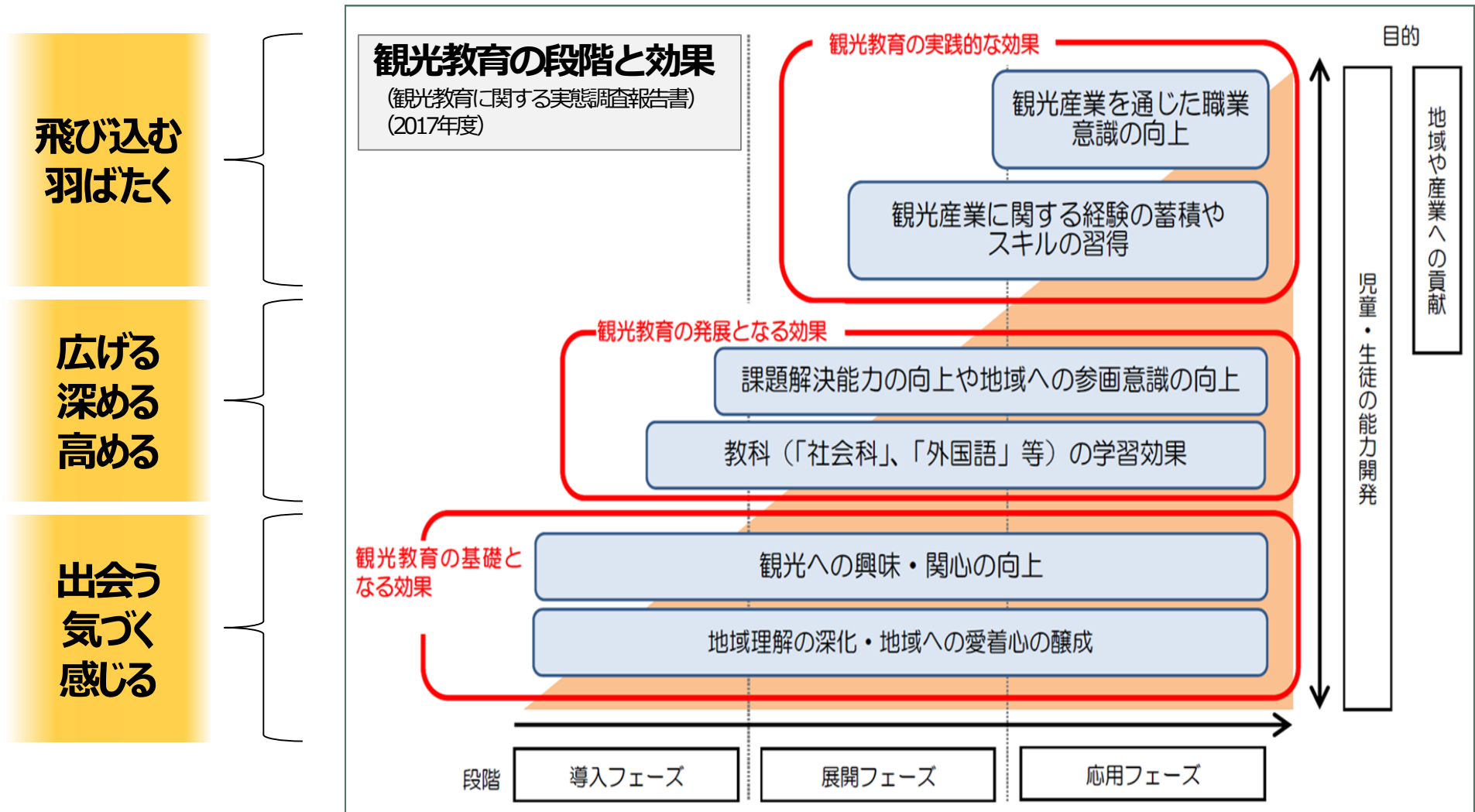
周知・気づき	指導視点・指導技法に関して	デジタルツールを活用した学び
	観光の範囲を理解した上での学び	学外組織・社会の力の活かした学び
教材・ツールづくり	子どもたちがわくわくし、 楽しんで取り組める学び	グローバルな活動・国際交流
プログラムづくり	事前準備・事前インプットの 必要性や取組方法	将来の観光需要者を創造する視点
ネットワークづくり	他地域との比較やファクトチェック	進路・キャリアの視点
	魅力を価値に変えること、 誰かの役に立つ、という落としどころ	日本の学習環境の強み
実施体制の整備	他者（他学年や社会）への貢献を 同時に実現する学び	…等々

---

# 【参考資料】

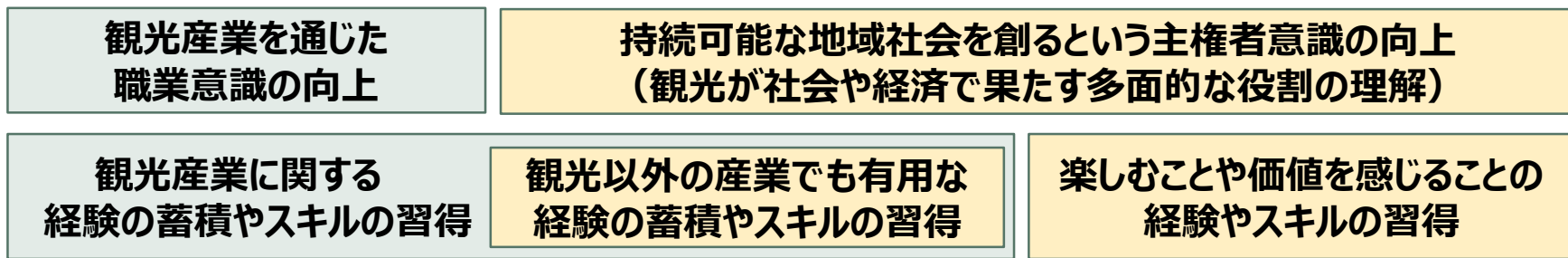
検討した事項（次年度以降の議論材料）

## ■ 過年度事業のとりまとめを受けて

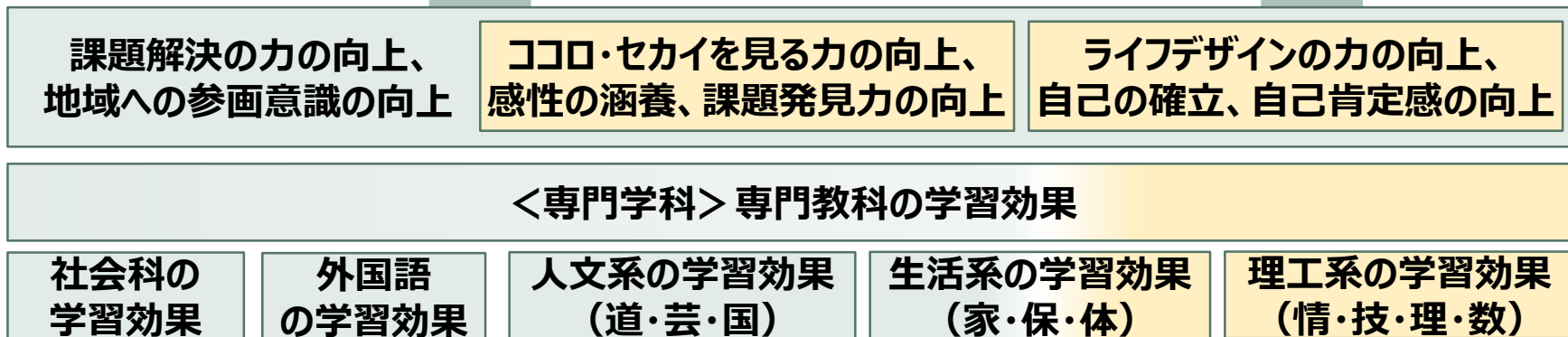


■「本年度の新規論点（黄色の四角領域）」の整理案

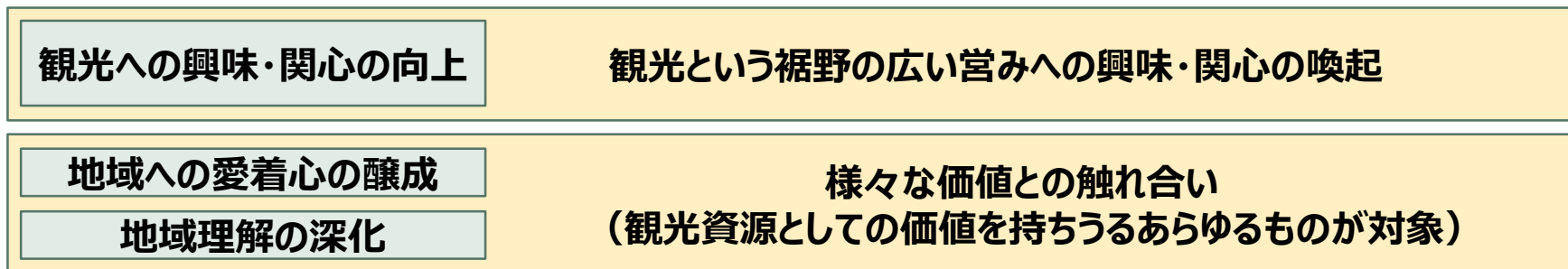
飛び込む  
羽ばたく  
～実践段階～



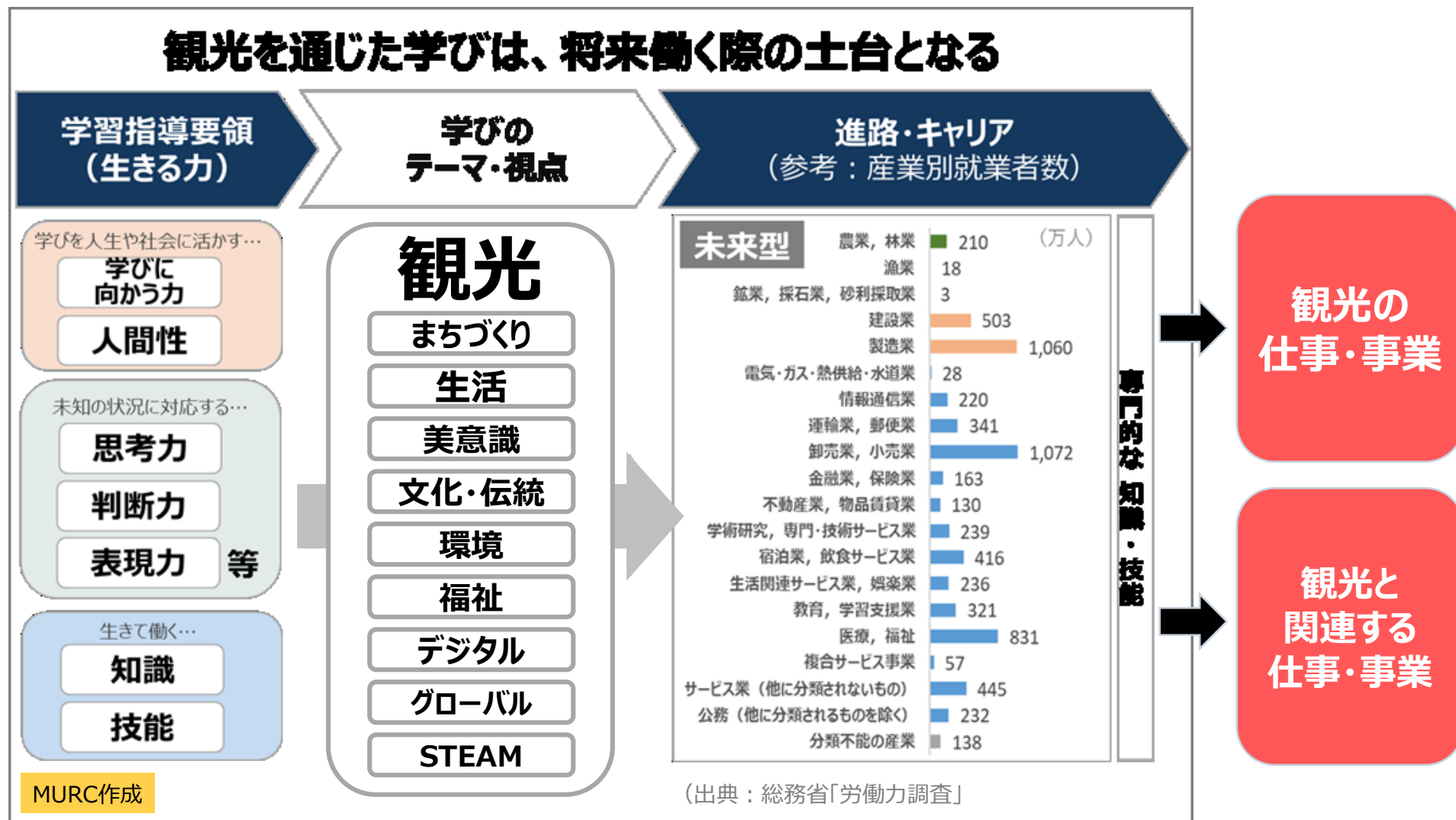
広げる  
深める  
高める  
～発展段階～



出会う  
気づく  
感じる  
～基礎段階～



■「観光教育で『育む力』と『育み方』」の整理案



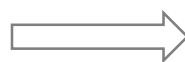


## ■「観光教育の『目的』」の整理案

### 観光教育の「目的」の整理案※今後の議論材料

**「社会とともに、  
観光を通して『豊かに生きる力』を育み、  
『持続可能な社会を創る』ことを目指す教育」**

子どもの成長  
(課題解決、ココロ・セカイをみる、ライフデザイン)



社会づくり  
(雇用・経済、多様性・共生、文化、環境、等)

**観光が社会や経済で果たす多面的な役割等について伝え、  
観光という裾野の広い営みへの興味関心を喚起し、  
自身の学びや成長につなげ、  
様々な立場で他者や社会へ貢献する力を育みます。**

## ■「観光教育の『意義・価値』」の整理案

### 観光教育の「意義・価値」の整理案※今後の議論材料

「学習対象」  
としての  
観光教育の  
意義・価値

■ 他者理解や社会課題対峙の経験を通じて、「課題解決の力」を育みます。  
子どもたちが郷土や他地域の魅力的な観光資源を理解し、郷土や各地域への愛着と誇りを醸成するとともに、各社会の実態・背景課題と向き合う中でボーダレスな視野・思考を拓き、地域の課題解決へと主体的に寄与する力を育みます。

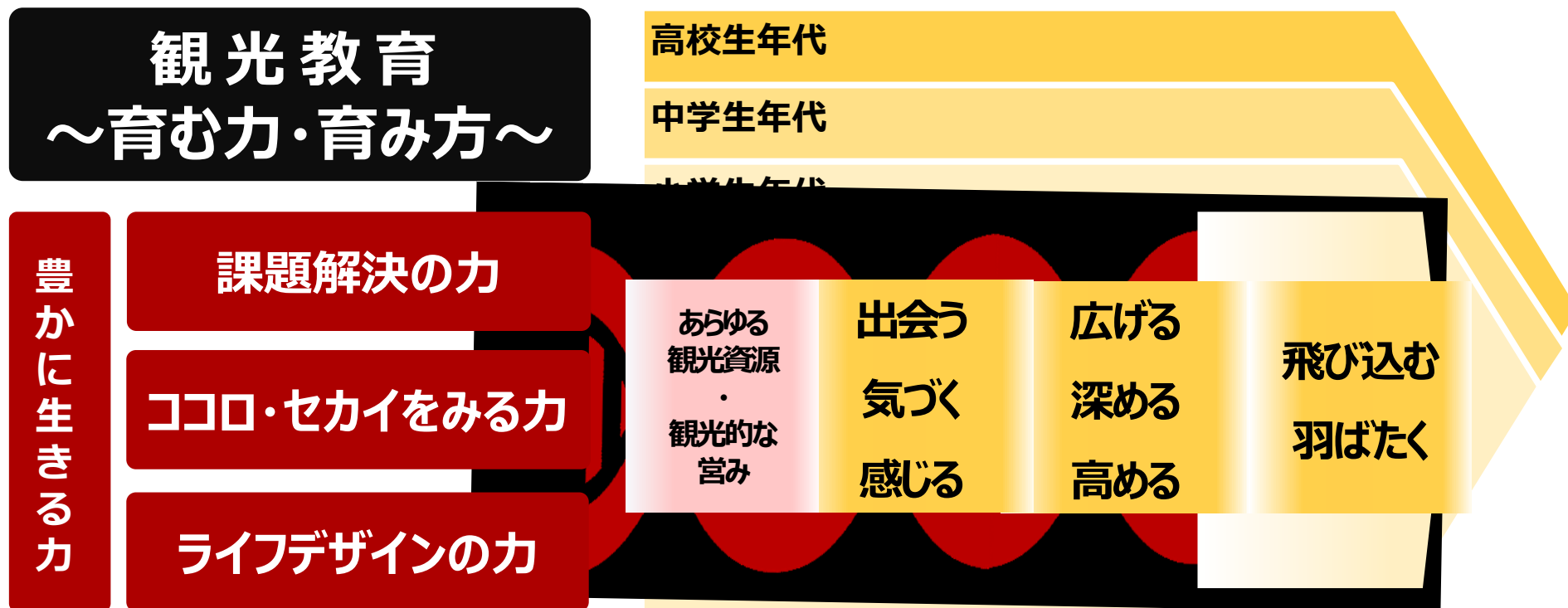
■ 多彩な価値に触れて感性を育み、「ココロ・セカイをみる力」を育みます。  
・子どもたちが楽しみながら様々な種類の価値に触れ、感性を育むとともに、人間の心や物事への深い洞察力を育みます。

■ 自己の確立や、自己肯定感の涵養を通じて、「ライフデザインの力」を育みます。  
・子どもたちが自身の関心や志向性に気づく機会を提供し、多様性が強みとして発揮される社会像を共有することで自己肯定感を向上させ、キャリアやワークライフバランスなど、人生や暮らしを幸せにする力を育みます。

「学習ツール」  
としての  
観光教育の  
意義・価値

■ 多彩な学びをサポートするとともに、観光教育ならではの学習効果を提供します。  
・多様な学習テーマや社会課題と接点を持つため、様々なアプローチで探究的な学びが可能です。  
・様々な主体が学びに参加でき、全員参加型・全世代交流型の学びが可能です。

■「観光教育で『育む力』と『育み方』」の整理案



- ①子どもたちを取り巻く、様々な「価値あるもの（観光資源）」や「観光的な営み」が、各教科や活動において、既に扱われています。
- ②上記の力・育み方を意識した学びを指します。

## ■観光教育の「発達段階別の展開イメージ」の整理案

小学校

中学校・高校（普通科）

高校（専門学科）

アクション軸

国内外の各地の魅力や独自性に気付く。  
探究・交流を通じ、魅力の価値化に携わる。

観光を通じて、  
気付く力、  
問いを立てる力、  
解決する力を高める。

プロデュース力や俯瞰力を高める。  
・観光の基礎能力（魅力の価値化や交流促進に関する理念や方法など）を育む。

持続可能な地域社会を創る

マインド軸

観光の意義について理解を深め、  
日本及び地域への愛着と誇りを醸成する。

観光を通じて、自己の価値観・美意識・教養を育み、  
人間形成や将来設計に繋げる。

■「観光教育の普及方策（観光庁関与の可能性のあるもの）」の整理案

必要資源：情報、モノ、労力、資金、枠・場、等

働きかける対象：学校・教員・地域・民間、等

取組類型	取組観点	表彰	認定	補助	連携・交渉・要請
周知・気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>観光教育の魅力を表現</li> <li>観光教育のプロモーション活動</li> <li>指導者の養成</li> </ul>			勉強会・研修	
教材・ツールづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習コンテンツ・題材・資料</li> <li>学習ツール（ハード・ソフト）</li> </ul>		モデル校・プログラム認証 パイロット事業	ワーキンググループ 調査研究事業	取組要請 ・ 連携要請
プログラムづくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>モデル事例の創出</li> </ul>	優秀賞 功労賞			
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係者のネットワーク</li> <li>指導者が繋がる場の創出</li> <li>指導者のレベルアップ</li> </ul>		アドバイザー制度		協議会
実施体制の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>学ぶフィールドの創出</li> <li>支援者と繋がる場の創出</li> </ul>			交流イベント・交流機能	

項目	内容・目的等
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 観光教育に関する最新の議論・情報の流通を図る。</li> <li>● 観光教育の関係者ネットワークを拡充する。</li> <li>● メディア等への取り上げを通じた、観光教育の注目度向上を試みる。</li> </ul>
開催日時	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 3月13日(土) 午前 10:00～11:30 シンポジウム 午後 13:00～15:00 ワークショップ</li> </ul>
開催場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>● オンライン開催(午前: Zoom Webiner、午後: Zoom 会議室)</li> </ul>
費用・申込 定員 想定参加者	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参加費無料 事前申込制</li> <li>● 定員 シンポジウム 400名 (※事務局含めると最大 500名) ワークショップ 40名</li> <li>● 教育関係者(教員、教育委員会、教科研究会関係者、教育学部生、支援組織・NPO、等)、観光関係者(観光・商工部門の自治体担当者、観光関係団体、等)</li> </ul>
実施内容案	<p><b>■ 午前 10:00～11:30 シンポジウムパート (定員 400名)</b></p> <p>① <u>主催者挨拶 &lt;10分&gt;</u> ※可能であれば事前録画 「(仮) 観光を取り巻く現状と観光教育の取組について」</p> <p>② <u>話題提供(観光教育の先進事例を共有) &lt;40分&gt;</u> 発表 A (先生) 10分 ※可能であれば事前録画 発表 B (先生) 10分 ※可能であれば事前録画 発表 C (先生) 10分 ※可能であれば事前録画 発表 D (学外) 10分 ※可能であれば事前録画</p> <p>③ <u>パネルディスカッション &lt;40分&gt;</u> 「観光教育の普及に向けて」 ※可能であれば生放送 パネリスト: 森下先生 寺本先生、村上先生、文部科学省〇〇、JTB 中野様 コーディネーター: 宍戸先生  これまで様々な学校や団体において観光教育に取り組まれているが、それぞれ共通していることや、今後観光教育に取り組む際に意識すべきことについて議論する。</p> <p>④ <u>閉会</u></p>

■午後 交流ワークショップパート（定員 40 名：先着順）

⑤ 交流ワークショップ 午後 13:00～15:00

- ・Zoom ブレイクアウトルーム機能を利用し、4～8 人単位のグループを組成。
- ・討議結果は全体共有を行う。

討議テーマ案「○○○」

■活動の流れ

( i ) 事務局説明（討議テーマについて）

( ii ) ディスカッション。【60 分】

( iii ) 討議内容の全体共有・質疑応答。【40 分】

各グループより①観光ネタ、②面白い使い方、をいくつか発表。

# 【参考資料】 2020 年度 観光庁観光教育・分科会

## 議事要旨（第 1～3 回統合版）

### 内容

<b>1. 時代感・潮流</b> .....	4
<全般> .....	4
<教育> .....	4
<社会・観光> .....	4
<b>2. 意義・目的</b> .....	5
<検討の前提・方針> .....	5
<人間形成や徳目の視点> .....	5
<地域社会の維持> .....	5
<地域の魅力を価値に変える視点> .....	6
<他者の視点、観光先進国の国民、マーケティング、ホスピタリティ> .....	6
<国際理解・共生社会> .....	6
<価値観・美意識・世界観・教養・問う力・気づく力> .....	6
<社会の中で学ぶ> .....	8
<応用力・多角的視点> .....	8
<人的交流、世代を超えた学びあい> .....	9
■「意義・目的」の素案に関する第 2 回・各分科会のご意見 .....	9
<b>3. 社会との関わり</b> .....	10
<地域との関係> .....	10
<社会人期への接続> .....	10
<キャリア選択> .....	11
<多様性への貢献> .....	11
<b>4. 育む資質・能力</b> .....	11
<検討の前提・方針> .....	11
<問題解決や自己理解のための気づく力> .....	12
<主体性・実行力> .....	12
<俯瞰的・客観的に見る力、批判的思考> .....	12
<創造力、提案力、企画力> .....	13
<表現力> .....	13
<データや情報の収集・分析・活用> .....	13
<品位・モラル> .....	13
<コミュニケーション力> .....	13
<マルチタスクの力> .....	14
<つなぐ力、統合する力、プロデュースする力> .....	14
<協働力> .....	14
<粘る力、向き合い続ける力> .....	14
<旅行する力> .....	14



■「育む力（意義・目的、資質・能力）」の素案に関する、第2回・各分科会のご意見	14
<①他の教育との違いを魅せる必要性>	14
<②教員や教育組織が、観光教育を自分事と感ぜられる表現>	15
<③観光教育では様々な力を育めるという事実>	15
<④高校普通科と専門学科の違い>	16
<⑤発達段階別の整理の方向性>	16
<⑥具体的な個別の文言修正>	18
■「観光教育で育む力の展開イメージ」の素案に関する、第3回分科会のご意見	18
<①全般>	18
<②小中学校>	19
【地域の定義】	19
【地域の魅力を価値に変える】	19
【楽しさ】	20
【中学校 ～プランニングする力、旅行する力～】	20
【中学校 ～キャリア教育と課題解決活動～】	20
<③高校普通科>	20
【文言に関して】	20
【気付く力】	20
【対自己と対課題】	21
【アウトプットのレベル感】	21
【海外も含めた魅力の伝達】	21
<④高校専門学科>	21
<⑤接続性・連動性>	22
<⑥その他>	22
<b>5. 求められるプログラム要件</b>	23
■ 学習づくり・プログラムづくり	23
<①指導視点・指導技法>	23
<②観光の範囲を理解した上での学び>	23
<③子どもたちがわくわくし、楽しんで取り組める学び>	24
<④事前準備・事前インプットの必要性や取組方法>	24
<⑤他地域との比較やファクトチェック>	24
<⑥魅力を価値に変えること、誰かの役に立つ、という落としどころ>	25
<⑦他者への貢献を同時に実現する学び>	26
<⑧デジタルツールを活用した学び>	26
<⑨学外組織・社会の力の活かした学び>	26
<⑩グローバルな活動・国際交流>	27
<⑪将来の観光需要者を創造する視点>	27
<⑫進路・キャリアの視点>	28
<⑬日本の学習環境の強み>	29
■ 実施枠	29
<①学校教育における実施枠>	29
<②教科学習との関連・連動>	30

<③修学旅行> .....	32
<b>6. 普及方策</b> .....	32
■ 領域 A：「周知」に関する取り組みについて .....	32
<周知に関する総論> .....	32
<観光に関する誤った印象・前提知識の払拭> .....	33
<観光教育の全体像の見える化> .....	33
<既存の学びの見つめ直しというメッセージ> .....	33
<学習設計の思想伝達> .....	34
<周知の場・経路・手法> .....	34
■ 領域 B：「教材・コンテンツ」に関する取り組みについて .....	34
<学びの運営支援：副読本・資料・コンテンツ、等> .....	34
<学びの設計支援：事例、手引き、指導案、等> .....	35
■ 領域 C：「プログラム」に関する取り組みについて .....	36
<各教科の学習における観光教育の実現> .....	36
<修学旅行や遠足などの捉えなおし> .....	37
<縦・横の連携や連動を確立> .....	38
■ 領域 D：「ネットワーク」に関する取り組みについて .....	38
<指導側の体制・ネットワーク> .....	38
<学び手の体制・ネットワーク> .....	39
■ 領域 E：「実施体制」に関する取り組みについて .....	39
<全体的な動きのグランドデザイン> .....	39
<指導者の活動インセンティブ創出> .....	39
<活動資源の確保、他事業との連動> .....	40
■ 領域横断の取り組み .....	41
<モデル事例の整理・創出> .....	41
<情報や知見を共有できる仕組みづくり（アドバイザー制度、プラットフォーム、等）> .....	42
<評価視点・評価方法の確立による指針設定> .....	43
<観光を学びたい子どもを増やす視点> .....	43
<イベント、コンクールの活用> .....	43
<観光ビジネスの枠の活用> .....	44
<各行政の取組連動> .....	44

## 1. 時代感・潮流

### ※「意義・目的」の素案に関する各分科会のご意見

#### <全般>

- ・「持続可能な地域社会」という言葉は、日本の教育動向（学習指導要領に同文言あり）だけでなく、SDGs を重視する経済・社会動向からも、世界観光倫理憲章の面からも、重要なフレーズ。

#### <教育>

- ・時代の変わり目の中で、私たち教員の考え自体を改める時期に来ているが、なかなか現場は改まらない（例：専門高校における資格取得重視、進学実績などの対外発信データ）。
- ・18歳が成人となり選挙権が与えられる。政治、選挙、経済との関わりの中で、大人としてどう主体的に地域と関わっていくか、より身近な問題となる。
- ・デジタル・オンラインが浸透している。
- ・新学習指導要領への対応が挙げられる。
- ・進学やキャリアに対する考え方が変化している。

#### <社会・観光>

- ・北海道は観光王国でありながら、観光に生きる道を探す反面、観光ではダメだと反対だと対立するような地域差も存在する。
- ・根本的なところで地域創生の在り方を考えなければいけないという勢力もあり、それらの問題も含め、学校の立ち位置や教育について、地域創生で何ができるかと考える視点がある。
- ・10年後、20年後、人口が減少する地域が多い。各種の需要が縮小するため、ビジネスの在り方、ひいては個人の生計の立て方（生き方）も再考が必要。今いる子どもだけでなく、その下の世代の教育やビジネスの在り方も重要。
- ・観光に依存してきた地域やサービス業、特に中小規模の法人の倒産や淘汰が始まっており、今後の復活が課題。
- ・SDGs、持続可能性が重要。
- ・ワークライフバランスの実現が重要。
- ・大都市と地方との間を行き来するワーケーションや移住も、今、非常に注目を浴びているように思う。働き方改革も含めて、日本の中で生きていく、外国と付き合っていく、日本の魅力をどう高めて行ったらいいのか、これは、国民各層で考えていく大きなテーマになると思われる。そのための基礎的な能力をこの観光教育が部分的に担えるのではないかと感じた。

## 2. 意義・目的

(※別紙：「事前にいただいた意見」も要参照)

### <検討の前提・方針>

- ・観光教育が他の教育とどう違うのかを明確にすべき。
- ・初等中等教育では観光推進を支える基礎教育が含まれる。地域理解や観光分野の関心など狭い印象にならないよう、教育がもつ意義が観光にも波及する視点を含め、観光庁として初等中等教育における観光教育の意義・目的をどのように打ち出していくか明記すべき。
- ・普通科教育としては、科目特性を活かすより観光の力を利用している側面が強く、そのような軸も必要かもしれない。
- ・教員としては観光で学ぶスタンスが馴染む人もいる。そうした教員は、観光を教育ツールとして認識しており、気づく力や興味を持っている分野の調査の学習ツールとして感じる。
- ・教育現場はひっ迫しており、新しいものを追加できない状況かもしれない。普通教育で観光科という新教科を作れるとは思わない。人間形成や国際理解に役立つなどの理解を促し、いかにメリットの多い学習場面を提供できるかが重要。
- ・専門学科においては、観光（産業）の基礎知識習得と実務技術が加わる。
- ・学校では様々な授業や行事が既にあるため、学校教育の中ではなく課外活動として商売体験に取り組んだ。その中で学校現場だけでは育めないような学び、気づけなかった子どもの良さに気付くといった体験をすることができた。
- ・観光教育の意義・目的となると、大学における観光教育にも通じることが望ましい。

### <人間形成や徳目の視点>

- ・観光教育が教育界で認められるためには人間形成の視点を明確にしないといけない。そうでなければ学校や教師は納得しない。過年度までの検討結果を元にとすると、大きく欠けているテーマや要素。
- ・観光を題材にした学びや、観光を通じた学びで、どのような徳目（人間性や態度）を得られるかに帰着させないと定着しない。
- ・人間形成にどう役立つのかを明確にしないと、産業界で観光が大事と言っているという認識だけで終わってしまう。

### <地域社会の維持>

- ・地域の方々や企業と連携において、高校生が地域に出ていくことは非常に価値があり、そこは観光という方法が有効。
- ・観光教育はこれからの日本の地域社会を救うための一つの教育であり、教育界が無関心ではいけない
- ・人口減少社会を怖がる教師がいなく、その問題意識がまだ地方の教師には足りない。観光教育というのは、将来の日本の行く末に不可欠な学びとして訴えていく必要がある。
- ・観光が非常に裾野が広い産業であるため、観光産業を理解するというのはなかなかつかみどころがないという難点もあるが、逆に言うとそれだけ他産業に影響を及ぼす、非常に公共性の高い産業ともいえる。
- ・観光業界に就職をしたい学生は多いが、観光業界のことをよくわかっていない。観光業界のすそ野は広いものの、「観光業界＝旅行代理店」と思っている人が多い印象もある。
- ・観光振興も、地方創生も、人口減少社会対策も地域の問題だが、学校の先生は、地域立脚の学校だと表面ではいうものの、全体としては大きなうねりにはなっていないという、このあたりの意識の差

がある。

#### <地域の魅力を価値に変える視点>

- ・地域の魅力に関しても、小学校段階ぐらいいはあれもこれもいいねという感じで、ランキングや絞り込みができない学習が展開して、いわゆる自己満足の「良かったふるさと学習」になってしまう。観光教育をより磨いていくためにも、地域の魅力あるいは日本の魅力を価値に変えるという視点が必要で、1ランク上げないと新しさが無い。
- ・自分が住んでいる地方と日本の魅力、さらに世界の中でどう位置付けるかという、入れ子構造の中で私たちは生きている。そういった広い視野から、自分の文化や地域の魅力を、「価値」というレベルまで研ぎ澄ませて考えることができるかどうか重要。また、観光産業や地域の観光関連に携わっている方々、あるいは一般の人たちが、いかに自分の地域の観光水準をあげようと努力していくかということを知りつつ、自分も参画していこうと、そんな次世代が育成できれば日本の未来も少しは明るくなるのではないかと。
- ・地域が観光によって光が当たったことによって、そこからブランディングされていき、地域がより魅力的になっていく、僕たちの魅力はここなのだとの地域の人が認めてくれたことによって、より自分の地域の魅力を高めていくことができるのも、これからの未来を作っていく上で大切なこと。

#### <他者の視点、観光先進国の国民、マーケティング、ホスピタリティ>

- ・観光教育がふるさと教育と異なる点は、「他者の視点」があるかないかが大きな違いだと考える。来訪者の立場で自地域をどう見るのか、逆に、旅をする際は現地の人と関わりながら自分たちがどのように見られているかを類推しながら旅を楽しむなど、観光大国までいかずとも、観光先進国の国民を標榜できないか。観光先進国の担い手づくりとして、観光教育のターゲットの1つになる。
- ・相手が本当に行きたいと思っているのかという問いかけを改めてすることで、初めて他者の視点に立てる。自己中心の見方からの脱却により、広い視野を得ることができる。観光教育こそが、楽しさを感じながら、マーケティングを含めた他者の視点に立つことができる機会になる。
- ・観光ではもともとホスピタリティが非常に重要。他人を楽しませるといった観点や、他者の目線で思いやりをもつことが原点。地域の素材に入って行って誰かに楽しんでもらうことを、交流を通して体験するためのきっかけは、小中学校の時点では観光が適しており、「人間の心に関わる力」を育てることができる。

#### <国際理解・共生社会>

- ・共生がキーワードか。家族や友人の共生→地域の共生→人類の共生（≒平和）と繋がる。共生社会の取り戻しや実現が観光のキーワードと捉えられる。
- ・実社会との関わりや意義目的に繋がる学びへと磨き上げ、観光教育を成熟させる必要があり、国民各層に観光教育が必要な学びだと理解してもらい必要がある。

#### <価値観・美意識・世界観・教養・問う力・気づく力>

- ・現状は教育全般として就職のための学習が強く、豊かに楽しく過ごすことの視点が欠落している。経営やビジネス・まちづくり・システムなどの視点が観光教育には多いが、小中学校の多感な時期こそ観光の楽しさや、観光の魅力を教えることが必要。
- ・今まで観光は、産業や日本の教育で美德とされる労働、稼ぐ、成長という文脈で教えられてきたが、今後は国語（文学）や芸術が担ってきたような、いかに豊かに生きていくか、生活にゆとりを持って

- いくかなど、今までにない哲学的な価値観を表明することも大事ではないか。
- ・旅の受入れ側として生徒がどう振る舞うか、キャリア形成をどうするかという視点だけでなく、自分が楽しむという視点、「自分のライフを楽しむ視点」も存在する。
  - ・日本というのは、働くことが正しい、働かないことは正しくないと教える風潮がある。つまり、生産は正しいが消費は正しくないと教えており、その典型が（お金の）ムダ使いをするなどという教えか。でもそれは、観光からすれば間違い。
  - ・実際に就職して会社に入ると、働くことだけでなく、働く時間以外の時間の重要性に気付く。
  - ・何に楽しみを見出し、人生を豊かに生きていくか、高校教育ではなかなか持ちにくい観点。どこかで豊かな人生をイメージしながら進路を検討してほしいと思う。大学などの進路選択では、将来の楽しみや仕事のバランス、こんなスキルがほしいなど、人生を楽しむ視点も含めた進路指導が必要。観光を通じて自分のやりたいこと、豊かな人生を考えてみないか、と提案できるかもしれないと思う。
  - ・美意識や世界観が育たなければ、自分がどう取り組んだらいいかという自分の構えができないので、観光産業も前向きに発展していくための資源を多く失ってしまうことにつながる。
  - ・物事を多角的に判断できる幅広い教養として大学・社会人ではリベラルアーツがあり、それを小中学校や高校の段階に落とし込む意味では、ベースとなる生きる力と捉えられる。
  - ・教養に関しては、知れば知るほど面白くなることを教えることや、
  - ・視点を広げると、今後、何か断片的な知識を持ったところで、知識は更新されていってしまう。自分には何が足りない、世の中としてはこれが必要、として動けたりするための体力として教養は捉えられるべきか。
  - ・問題を立てる力が大事。そもそも、問題を発見することができない人も多い。問題を与えれば、答えられることは結構できる。100分与えられたら、95分ぐらいは問題を立てる方に時間を使った方がよい。問題が立てられたら、あと5分で回答はでる。問題を立てる力というのは、よく見る、観察するなどなど、当たり前のことになる気がする。
  - ・すごく視野を広げると、本質的なポイント・問題はここなのだとして、収斂していかないといけないので、拡大と収斂するということを、小中高の学科や科目でやればいいのかもかもしれない。
  - ・民間事業者として観光教育を通じて中高生と触れている中でも、問う力、気づく力についてはあまり焦点が当たっていないかもしれない。探究学習や課題研究に取り組む学校も多いですが、何の問いも出ず、最初の研究のテーマやディスカッションなど、初めの一步がものすごく踏み出しにくい印象がある。
  - ・美意識や世界観、問う力などを今の高校生に対して講座があると、自分の世界がもう1つ膨らむのではないか。
  - ・教養の取り扱いは、偏差値の違いや学校によって違うと思われる。偏差値がそれほど高くない学校は、教養というよりも身体知で教えていくことができる。偏差値の高い学校は、教養を教えることがシステム化されている。悩ましいのは、中の上ぐらいの学校で、第2志望でも受かればいいのかという雰囲気のある学校だと、教養がないがしろになり、まとまりがない状況になっているかもしれない。
  - ・昔から言われているが、人間は好き勝手にいいといわれても、分からないのでお題をくださいということになってしまいがち。自由であることについて教えないといけない。
  - ・好きなものを見つけさせるということを早い段階からやらないと、あまり面白い人が育たない気もする。逆に言うと、各科目を学ぶ意味は何か、なぜ自分は勉強しているのかを学んだり考える機会がないのかもしれない。
  - ・学ぶ意義について、高校までは、あなたがこうすると社会はこう発展しますと教える一方で、学ぶとあなたはどういう風に自分の糧にできるかかという話はあまりないかもしれない。

### <社会の中で学ぶ>

- ・普通教育は教室で実施し、社会と接点を持たない授業が一般的。社会との接点を持って活動できることが観光（教育）の強み。それを伝え、現場の先生がどこまでやる気を持ってくれるか気になる。
- ・子どもの興味関心を高めるためには、机の上だけでは絶対に伸びないと思う。色々な体験活動や、自分が出向いて体感することや学ぶことを取り入れる必要性がある。
- ・社会とのつながりの中で、キャリアについて教えられる可能性があるのは観光教育の特殊性。
- ・観光教育は主権者教育の面を持つ。社会への関わりを意識するきっかけになり、教員の用意した枠組の中ではなく自分の力で社会が動くことを実感することも時にはできる。観光教育で実感できる特徴的な成果であり、観光教育の意義・目的ではないか。
- ・主権者教育は、政治・投票など二項対立で課題を捉えるのではなく、どのように社会と関わるかということを通して学ぶことと体験すること。
- ・学校は教員だけの組織なので、教員間で社会と関係ないことを一生懸命やり、それが学校の権力構造とつながるなど、不健全な状況に陥ることもある。そのため、社会とつながって、社会で動いていることと教員が連携する必要がある。社会がどう動いているか、教員も調べ、生徒も学べる。社会連携で教員も学生も学ぶ仕組みを作って、それを観光庁が証明（ディプロマ）する仕組みがあると良い。
- ・高校の専門学科も普通科も同様に、社会との関係づくりが重要です。観光としてどのような職業の広がりがあるか、そこに携わる人たちはどのような人たちか、どのような仕組みと制度でつながっているのか、をきちんと教える必要がある。また、それらの方々と交流をしながら、観光における価値や課題を知ることが重要。（例：外国の文化との違いは、教員ではなく外部とのつながりで深めていく必要がある。）

### <応用力・多角的視点>

- ・観光は非常に応用が利く。
- ・観光教育が様々な教科で横断的に実施教育できる。
- ・専門教科だからこそ他にはない色々な学びや方法がある。
- ・観光教育を受ける生徒は、観光教育をあまり受けない生徒と比べて、異なる視点を持つようになっているという評価を受けている。
- ・小中高どれをとっても、地域を深く知ることができる、その結果、外にも興味を持って知っていけることが観光教育の持つ価値。
- ・高校普通科は、専門的な技術や知識をそれほど重視しないところがある。この技術や知識が社会の中でどう作用するのか教える必要があるか。
- ・小・中・高と学んできた、いわゆる国語・算数・理科・社会の枠組みから社会の実際の研究あるいは実社会での活動につなげていくときに観光の観点で地域を見ていくと、今まで持たなかった発想を持つのではないかと。今までの学校教育の枠を壊して、社会に自分がつながっていくことを考えていく観点が観光教育の中で得られる。
- ・観光教育ではアウトプットがしやすい。教育活動には様々な教育目的をもって各教科や学校全般の活動に取り組みされているが、その成果が具体的に見える形にならないことが多々ある。しかし、学校には教育活動に一定の評価をしなければいけないため、こういった形で地域とつながり、生徒たちはこのようなことを考え、実際にこのようなことをやってみましたということを見える形にすることができる点で、観光教育は取り組みやすい。観光という大きな枠組みで教育を考えてみませんか、今後観光教育を普及していく中で是非ともPRしたいところ。

### <人的交流、世代を超えた学びあい>

- ・観光は、地域だけでなく人や交流に焦点を当てられることが大きな意義。3世代間の交流や、地元との交流などの要素がある。
- ・観光とは、全ての人が旅行をし、地域に出ていくことのできる活動であるため、どの学年でもそれぞれの体験を語って、議論をしやすい。小中高、普通科、専門学科が同時に縦を意識しながら一緒に活動できるのは、観光以外ではできないのではないか。
- ・同世代の中学生同士小学生同士での地域を超えた学びあいを通して、各地域に共通していて一般化できることと個別化していることの二つのテーマ学習ができるのは、観光だけなのではないか。一般化することと個別化することは、意外と難しく、重要な視点。
- ・小学生同士の発表では形にはまったものしか中々表現できないが、例えばプレゼンした相手が大学生や高校生であれば、質問する内容も具体化される。
- ・我々大人も、小学生に説明したりすることで、大人が分かりやすさを学ぶこともできる。例えば外国人が来た時に、日本の文化や言葉を知らないため、初心者に教えなければならないという中で、異者・他者にどのような言葉で伝えるかといったコミュニケーションの観点で観光にはたくさんある。

### ■「意義・目的」の素案に関する第2回・各分科会のご意見

- ・目的において、「社会とともに」というキーワードを入れられたい。
- ・「探求的な学び」とあり可能であれば「探究」に修正。
- ・観光教育の大きな目的に記載の「持続可能な」というところはこの前もこだわったところなので、そこについては入れてほしい。
- ・(※育む力(資質・能力)に関する議論は後述)



### 3. 社会との関わり

(※別紙：「事前にいただいた意見」も要参照)

#### <地域との関係>

- ・観光自体を学ぶことで生徒の地元に対する意識が大きく変わってくる。
- ・生徒の活動とは別に個人的に色んな企業を訪問して話を伺い、地域で開催されているイベント、コミュニティに参加して、企業間の利権、国家間の利権などを肌身で感じることができる。
- ・地域協働では「生徒が知識をつくりだし、地域に還元する」と捉えられる。「知識創造」や「知識定着」とセットで語られてもよい。
- ・子どもは地域の中で能力を発揮した経験がないまま県外に出て行く。進学のために夏休みも補習で教室にいるなど、将来の夢が育たない一因。地域の中で社会との関わりを作っていくことで、自分の能力を発揮できる経験がUターンにもつながる。
- ・地域とのかかわりで思わぬ化学反応がある。活動が文化継承などにもつながる。
- ・伝統を守る、見せるものがある、これだけで一つの観光教育であり、自分たちの地域の観光素材を自分たちの手で守っているのは非常に大きな取り組み。各地域にもこのようなことがあると思うので、まず小学校段階では地域に目を向けて学ぶ段階。

#### <社会人期への接続>

- ・SPHで、マーケティングを学年全員が履修し、思考技術や考える力を養うことになった。教員の意識も変わり、学校全体にも重要性の意識が芽生えた。
- ・ビジネスとはどうあるべきかを含めて、教育機関からは捉えられ直す必要がある。企業だけでなく、公的機関でもマーケティングは非常に重んじられている。
- ・商業系では、ゼネラリスト（コーディネーターとかプロデューサー）の育成が中心であり、「何と何を組み合わせると新しいアイデアが生まれる」というところを担うのが商業の学生であり、日本自体としてもそういう人材が足りないと思っている。
- ・即戦力的に「観光×○○」といった特定（又は新領域）の観光人材を育成しようとする場合、観光以外の専門性を持つ人材に、観光についての知識やスキルを教授する方が効率的かもしれない。（例：中国語ができるスキーインストラクターは、スキーインストラクターに中国語を教えるより、中国語ができる人にスキーを教えるほうが早いかもしれない。）
- ・高校教育の出口である就職や進学において、将来的には経験や研究成果を地元を活かす志向を持つ人材づくりも見据えたいところ。
- ・学校での学びでは、様々な人や団体と協力できると良く、将来的にその学生が懸け橋の役割を担えると理想的。
- ・自分自身が興味の赴くままに調べてみたものはこういう要素もあるんだということを生徒と共有して、さらに次の研究に伝えていくようにすると、課題を見つけること、現地調査から気づきの面白さに気づいていく。その面白いことを体験することが、今後社会に主体的に携わるという成功体験は大学生活でも生きてくると思っている。

#### <キャリア選択>

- ・観光教育を実際にやってみると、生徒の進路に大きく影響が出てきていると思う。商業高校＝事務職の傾向だが、観光を学ぶ生徒は事務職以外の可能性も秘める（留学する子、日本語の勉強をしない子）。
- ・観光に携わる人の地域への思いは、高校生にとって楽しいなどの感想につながる。
- ・社会調査を通じて、人とのふれあいで得た感動などが、大学や社会人になった際の調査の動機になるかもしれない。
- ・大学進学だけでなく、職業とは何か、働くこととは何かについて興味を持つ子どもが多い。
- ・外国人と交流すると、仲間になれることを理解し、海外と何か関わるような仕事への抵抗はかなり減る。

#### <多様性への貢献>

- ・生徒や教員は、就職では旅行会社かホテルしかないという、狭い範囲の思考に陥っている現状が課題。企業や行政との連携で社会と関わる学びを行うと、旅行サービスといった観光領域だけでなく、商品開発、地域消費やマネタイズ、関係者間の連携などを知ることで、様々なことを学びたいと思う生徒が増え、それに関わる仕事や進路に関心を高める生徒が増えることとなる。

## 4. 育む資質・能力

**(※別紙：「事前にいただいた意見」も要参照)**

#### <検討の前提・方針>

- ・観光教育でないと教えられないことを明示していく必要がある。
- ・小中学校で培っていただきたいものは、高校や社会人の段階で生きるなどの理論的背景があると先生方に響くか。
- ・小学校では、低学年と高学年で違いはあると思うが、観光教育の実務面より、教育理念・教育価値を重視して認めていただくことが重要。
- ・小・中・高・大・社会という流れで、身につける能力や素養について整理を試みられたい。
- ・大学も学際的にやっていく問題が山積しているなので、この機会にそのようなつながりを構築する場を作るのが重要。
- ・観光教育はカリキュラムベースではなく、「コンピテンシーベース」でどういった力が身に付けられるのか議論していきたい。
- ・観光教育はビジネスや専門教育の認識が強いが、それでは広がらないため小中学校の段階から取り組む必要がある。高校普通科の教育は、専門教育と異なり小中の延長線上から発展させていく取り組みと思われる。
- ・観光振興に対する反感が存在するケースがあるため、地域の選択肢として公平な情報提供の中、もろ手を挙げて観光推進とするだけでなく、反対派の意見も聞きながら、それをどう調整していくかという力も重要。
- ・人口減少が各地で問題に。一人一人の役割が重要になる意味でも、バイタリティある子どもたちを観光教育から育てていく必要がある。
- ・学習者が外に旅に行くこと（旅行力）や、視野を広げていくといった、内発的な力も観光教育で養っていききたい。（元々はバックパッカーで大学時代に約30か国を周遊し、旅通して人生観や見えない力

が身につく、今後、それらを言葉として伝える努力が必とともに、どの言葉が教育で理解されるかを考える必要があると感じている。)

- ・専門学科では、課題解決策を考えるときに、安全意識や危機管理など実務的に重要な視点も強く意識することが特徴的か。
- ・観光庁の定める観光地域づくり人材育成のガイドラインには、リーダーに必要な能力として、企画戦略・分析計画力・組織づくり・PR・商品化・事業化が挙げられている。
- ・観光人材という観点からは、小中学校の段階で「もてなす」側面は学習できている印象がある。

#### <問題解決や自己理解のための気づく力>

- ・学問の入り口としても重要な「気づく力」を育むことに観光教育は貢献するか。レポートや現地調査で、生徒は無難にこなす状況もあるなか、対象に対して主体的にアプローチする体験が重要。子ども自身の「興味を持っている内容」、「出かけて楽しかったこと」などは、観光の枠組みで考えると立派な研究対象。興味の赴くままに調べて出てきたことは、素晴らしい社会調査に繋がる。
- ・生徒に「何が楽しい?」、「何がしたい?」と聞いても「分からない」という回答が多い。自分が好きなこと、興味のあること、得意なこと、やってみたいことに気づかず、あるはずなのに蓋をしまっている印象。
- ・自分のワークライフバランスを考えてもらいたい。現状の日本の教育はW(ワーク・労働)を充実する教育が先行しており、その労働の義務の次にL(ライフ)が意識されるべきことを観光教育を通じて学んでもらいたい。
- ・高校教育を通して将来設計能力も身につけてくるのではないか

#### <主体性・実行力>

- ・高等学校は実行力が重要であり、学習指導要領の主体性と表裏一体。
- ・「実行力」は観光教育において育てたい能力。「能力がない」、「私にはさすがでできない」など謙遜する生徒がとても多いが、まずは「実際にやってみる」、「続けてみる」といった能力の方が先行的に重要。
- ・失敗を恐れる高校生が非常に多い。「正解を答えられないといけない」、「間違えていたらどうしよう」などというところから、結局何も行動しない生徒が非常に多い印象。
- ・周りの人が認めてくれるものだけしようという風潮になっており、「自分の生活も豊かにする楽しいことである」ということを観光教育の中で求めないといけないと思われる。
- ・無難に成績を稼いだがる生徒が多い。普通科におけるよくない部分かもしれない
- ・専門学科においても、簿記や情報処理を学ぶ生徒に比べ、観光を学ぶ生徒たちは、自分から何かを探してつかみ取ろうとしていることが多い。

#### <俯瞰的・客観的に見る力、批判的思考>

- ・他地域との比較を通じて、「俯瞰する力」が身に付く。皆が同じ地域を調べるのではなく、共通した1つの見方を元に様々な地域を調べていくという取り組み方もできる。
- ・高学年の場合は、観光を軸に自治体間比較などを通し、視野を広げるなど、多角的・批判的な視点も含めていくとよい。観光を軸に俯瞰的な視点を持つことができる。そういった視点を、カリキュラムに落とし込めるかの検討が必要になる。
- ・小学校段階では地域に目を向けて学ぶ段階で、中学校や高校では地域から県内に広がったり、場合に

よっては日本に広がったりという形で広い視点になり、専門高校は海外まで含めてきちんと見ていく、比較していくというのが、発達段階別で見ていくべきところか。

- ・地域との関わり中で、どのように地域の人がお金を生み出しているのか、消費者になる前に生産者の経験をしてほしい。
- ・海外に行った子は日本の郷土の良さをもう一度見ている子が多く、一回は外に出ても、また戻ってきたいとなる子も多いのは事実。
- ・観光リゾートコースがグローバル観光コースに改名され、英語力の向上、異分野理解、観光の知識や技能を身に着けたグローバル人材の育成が狙いとなっている。

#### <創造力、提案力、企画力>

- ・単純に旅行ツアーが企画できるということだけではなく、様々なモノの考え方としてのコーディネート能力、プロデュース能力を育てていけると、観光分野のみならずもっと広い分野で活躍できる生徒が増えていくのではないかな。
- ・行きたいなと思うような、地域素材を活かした観光を考える「創造する力」も資質・能力の一つ。
- ・観光教育では、設計によって様々な資質を育むことができる。そして、(それらの組み合わせである)創造性の育成は観光教育の特徴。
- ・現実にはないものを作っていくという創造力は、観光はフレキシブルで適しているか。
- ・提案のできる企画系人材をいかに育てるかも、大きな意義となる。星空観光・夜空観光が今はブレイクしており、10年前では夜空が観光資源になるとはだれも思ってもみなかった。

#### <表現力>

- ・観光を取り上げることで、様々なツール（はがき、マップ、双六、CM作成など）を使って表現を豊かにすることができる。

#### <データや情報の収集・分析・活用>

- ・小中学校で情報の仕入れ方、見方について経験すると、高校におけるデータ分析につながる。現在のデータ分析は数学でメインに取り扱われており、地理に応用されている。高校の新しい学習指導要領に出ている地域分析でも、データ分析が要求されている。データ分析の前に行く側と受け入れ側で齟齬がないようファクトチェックを取り入れると、データ真偽の判断材料となり、データ分析の意味も大きくなる。データの視点は社会科だけでなく様々な教科につながるのではないかな。

#### <品位・モラル>

- ・観光をしたときや、外に行った時の態度やマナーなどの悪いと感じており、それを教える機会がないことを問題だと感じる。
- ・文学・美術・音楽・スポーツなどの実技系の学びでは楽しさがあると思うが、さらにその中の最高の美しさのようなものに「触れたいと思う」、「目指したいと思う」ということを観光で体験させたい。  
(例：なぜ京都がきれいなのか、体験し、考え、品位を磨く)

#### <コミュニケーション力>

- ・旅行の技術（どこの国に行っても旅行ができる能力）を育むことは重要な視点。
- ・オンラインも活用し、コミュニケーション力や、人と交流を促進する方法や理念を学んでもらいたい。
- ・観光を学ぶ子は、物おじせずに話せる子が多く、何を尋ねても必ず答えが返ってくる。観光を学んで

いるから人間力が高いのか、いろんな人と知り合う機会があるので、どこへ行っても物怖じすることがない。

- ・コミュニケーション能力は、日に日に成長する。また、プレゼン能力、おもてなしの心も育める。例えば、水たまりがあると「水たまりがあるので、こちらにどうぞ」とか、とても暑い日は「暑いのでこちらの日陰で説明します」という、ちょっとした気遣いができるようになり、商業高校の生徒が就職した際にすぐに求められる能力が、自然に観光ガイドで身に付けられる。

#### <マルチタスクの力>

- ・地方ほど1つの仕事だけでなく、パソコンを触ったり、POPを書いたり、ディスプレイをしたり、発注をしたり、複数の能力が求められる。おもてなしの接客だけでなく、色んなタスクを身に付け、プロデュースする力みたいところが非常に求められるのではないかな。

#### <つなぐ力、統合する力、プロデュースする力>

- ・色んなことを統合的にやったり、専門的にやったり、観光は学際的な学問なので、異分野のものをつないでいく力が観光で身につく印象。
- ・比較したり、実際にあるもの同士を組み合わせ新しいものを生み出すプロデュース能力が付く。

#### <協働力>

- ・できないことをだれかにやってくださいなど、一緒に協働する力、お願いできる力も1つの資質・能力ではないかな。

#### <粘る力、向き合い続ける力>

- ・問題を解決できなくても、次の行動として何を起こすか、何をすればいいか考えている力が育める。

#### <旅行する力>

- ・旅行の技術（どこの国に行っても旅行ができる能力）を育むことは重要な視点。
- ・オンラインも活用し、コミュニケーション力や、人と交流を促進する方法や理念を学んでもらいたい
- ・旅行する力、例えば、どうやってスマートフォンを利用するのかとか、どうやって電光掲示板を見ていくのかとか、情報をどうやって処理するかという力は中学生で学びがスタートするか。
- ・人として生きていく中で、旅をすることにどのような意味があるのかをきちんと捉えることが重要。
- ・なぜ人々は旅行をすることになったのか、ということ学ぶことも重要。

### ■「育む力（意義・目的、資質・能力）」の素案に関する、第2回・各分科会のご意見

#### <①他の教育との違いを魅せる必要性>

- ・大変に複雑で現代的な要素を絡めながら、その良さをピックアップして、束ねて、観光教育が差別化されて、他の教育より抜き出た形にならないと埋没してしまう。
- ・本当の観光の専門性は何かと考えると、コミュニケーション能力も1つだと思うが、それは観光でなくても身につくと思われる。
- ・専門的な実務面のレベルアップといが専門学科としては一番大事である一方、本質的な教育の価値としては、小・中・高（普通科）と共通する目的は前提として共有できる。
- ・観光教育を学ぶと、積極的に地域と関わる資質がかなり身につく印象があり、それは、普通科教育に

- 取り入れられることもある一方、専門教育でも普通科的な要素を兼ね備えている部分があるだろう。
- ・高校普通科は大学や社会とつながる可能性があり、そのことを我々は踏まえたいといけな。その意味では、大学のようなものの考え方や生き方が最終的な落としどころになり、大学や専門学校への進学時や、そのまま社会に出た時にショックがないように、「あ、これは考えたことがあるな」という考えを得られるように観光教育をしていきたい。それを考えると、個人の生き方や身構え方が非常に重要で、それを抜きに考えることはできない。日本の特性を生かしながら、日本の中で観光を使って生きていく人物像はどうあるべきかを議論していく必要がある。
  - ・普通科教育では、外に出ていく機会がなかなか持ちにくいのではという話が出た。普通科教育においても、どういう科目や機会を利用して、社会や地域とつながることを学ぶのが難しい。観光教育として使い勝手のいい機会（例：修学旅行）をうまく活用する視点が求められる。

### <②教員や教育組織が、観光教育を自分事と感ぜられる表現>

- ・指導していくのはやはり教員であり、教員がこの意義・目的を解説して、自分のものにして、子どもに与えていく形を取っていくためには、どんな言葉が必要なのか考えると、さらに広げよう的な文面になっていくと、逆に先生たちがまとめづらくなるのかもしれない、あまり広げすぎてしまっても、逆に先生たちを苦しめていく可能性がある。
- ・様々なことが盛り込まれているので、あとはどう精選し、インパクトのある言葉を使うかテクニカルなところかと思われる。
- ・観光教育に熱心な先生方は、観光教育を非常に教育的なものと思って活動にとりくもうとしている。特に普通科などを対象にする場合、観光教育は、観光という産業や仕事の解説ではなく、観光教育は教育プログラムであり、教育の議論をすることになると、目的・意義が、誤解されずに伝わっていくことが求められる。観光教育といったらホテルでの働き方の解説なんでしょと感ぜる人たちとのギャップを、関係者が感ぜているのではないか。
- ・普通科では「観光を『通じて』学ぶか」をいかに伝えられるかが大事。
- ・普通科の場合は、もしかすると職業教育の側面をあまり持ち出さない方がいいかもしれない。知識のインプット、学習成果としてのレポート作成、プレゼンなどが行われるなか、子どもたちが本当に自分のやりたいことを発見しているのかが疑問。型にはまっていくような状況に対して、観光教育は、自分の好きなものを見つけた、気づいたり、こういう旅をしたいなど「消費をする中で自己表現されている部分」があつて、人との違いを表現することができる。そのあたりを先生方や一般の方にどう理解していただけるかが難しい。
- ・観光教育を正しく捉えていただけると、各教科の先生をはじめ、観光の色々な要素と関連して、各科目の先生方が心の中で思っている大事なことを響かせられる気がする。そのあたりをうまく表現できないか。

### <③観光教育では様々な力を育めるという事実>

- ・事前意見も含めて、育む力はいっぱい出されており、どれも大事で、今日示していただいた観光教育の目的の中にもたくさんいい言葉が入っていて選べないのは事実。どれも大事で、全部並べて良いのであれば並べたい。
- ・育てたいと思っているものが多く育つのが観光教育。例を挙げると、国際的な視野、郷土を愛すること、コミュニケーション能力、言語学習への意欲、取材力、企画力、課題発見力、課題解決能力、アイデア発想力などがある。
- ・どこまで入れるかによって、何でもありになってしまうので悩ましいものの、外に非常に目が開かれ

ていくという、グローバルな視点を持つ部分がない印象。

- ・民間事業者として観光教育を提供する中で、教育効果をコンピテンシー（非認知能力）としてあらわす中では、①認知（課題設定、解決以降、論理的思考、疑う力、創造性）、②自己（個人的実行力、内面的価値、ヴィジョン、自己効力、成長、興味、耐性、感情コントロール、決断力）、③他者（表現力、共感・傾聴力、外交性、柔軟性、寛容、影響力の行使、情熱・宣教力）、④コミュニティ（組織への働きかけ、地球市民、組織へのコミットメント、誠実さ）に分けて整理している。

#### <④高校普通科と専門学科の違い>

- ・小中学校でも、キャリア教育や地域産業の活性化を考えた時に、観光は非常に重要なツールになる意味で、どんな産業に就職するにしても見る目を養う上で役に立つ。その点で、専門教育が別にあるという形ではないと思われる。一方、専門学科では、職業人の育成やプロフェッショナルの育成という観点があり、そこは明らかにカリキュラムとして成立していくので、違う示し方があるかもしれない。
- ・小中校を区切る一方で、高校は普通科と専門学科の2つの大きな軸があり、別の視点が必要。
- ・小中高年代+専門教育ということで、描き方もわかりづらいので、そのあたりが課題の1つ。
- ・普通科と専門学科では、前提となる基礎的な部分で、知っておいてほしいことに差がある。
- ・専門性があるほど、課題を見つける、課題を解決するという場に近づいていくことが多い。
- ・普通科教育は、専門学科と比べると見学や視察は断片的にはあり、自分の関心に基づいて調べたり、地域に出たりするものの、そこからアクションとして地域の人たちと一緒に動いたりすることはあまりなく、個人で完結するイメージがある。
- ・高校普通科における社会との連携として、高校生が社会にでてヒアリングするなど、そういったことができないわけではない。キャリア教育の文脈で商店に行って商店の話聞くこともできる。
- ・社会人のキャリア評価の一例として、課題設定やフレーム設定など「統合するような力量（コンピテンシー）」が重視されるため、特に普通科ではこの力量が重要。なぜかという、各教科の成績と、教科を超えて融合し自分の能力を高めることは別物で、それができないと、大学を経て、マネジメント層にまで成長していかない。これは、学校教育だけではなく、学校の力と社会の力を組み合わせる中で、子どもの力量を育むことが、とても重要な話だった。
- ・普通高校と専門高校との違いとして、自分で何かを作り出して実践すること（プロデュースすること）を1からできる気がする。
- ・総合力の体験、課題解決の力、結論にしっかりと導いていく力、誰かとつながっていく力、そのあたりは普通科の観光教育でもやるが、専門教育の場合は結果が出てこないといけない意識があるか。発表だけでなく、アウトプットも求められるため社会と近づく。
- ・単に放りっぱなしや、これやりたいねで終わるのではなく、形として出せるところまで持っていくというのが実業高校。社会に対して、何かしらのインパクトを与えることができることを、実体験で教えていく。
- ・普通科教育の中の観光教育は、いわゆるツールとしてだけ考えていけばいいのかというところではなく、ツールとして観光教育を使って教育に役立てる視点もある。ただ、その教育の中で将来を考えると、自分の地域の産業経済とか、地域の継続や持続性を考えた時に、専門性とは切り離せない部分が出てくる。そのあたりをどう描くかが、実は一番大切な気がする。うまく分けつつも、見た方が、観光教育の持つ広がりのようなものをイメージできればいいと思う。

#### <⑤発達段階別の整理の方向性>

- ・未来会議などから出された学齢に合わせた観光教育の発達段階やイメージが、最終的にこの協議会の

示す1つの大きな役割であり、これについては皆さん異議がないところと思われる。

- ・発達段階別の資質・能力をどう考えていったらいいか、出来そうな気はするが、口で説明するよりは、一回書いてみたい感じ。
- ・小学校としてはルールにとらわれず楽しむということで、冒険や、何もない近場の山に登るというイメージがある。中学校では、ある程度のルールを守って、規則的に行ってみたり、ある程度決められたグループで動くようになる。高校では、地域の見方を変えて、自分の育った地域の課題は何だろうという形で、自分で企画するような、大人たちと協働するような絵が考えられる。専門教育では、昔からのワクワクを通して、色んな人を楽しんでもらうとか、地域課題を解決して満足してもらおうとか、そういう形が考えられる。
- ・発達段階ごとの姿で行くと、小学生時代から、地域の一員であるということ意識させることが目的で、自分は地域の一員で、こんな地域で、こんな観光の地域の中で生きているのだということをもまずは認識する世代か。中学生になると、地域とつながっていく。何が出来るかはわからないけれど、とりあえず、いるところ繋がったり、そこの世界とつながったりして、目が広がっていくようなイメージか。高校のいわゆる普通科と専門家の違いが何かというと、多分、普通科は、課題を自由に発見できる感じか。専門家は、課題を発見した上で、解決に向かって実践するというのが専門家であるイメージの絵があるとよい。
- ・小学校の頃は、地域の魅力とか周りに関心を持ち、自分もそのメンバーなのだと、アイデンティティに気づくとき。中学校になると、その中の輪に入っていく感じ。高校生になると動き出すイメージか。普通高校の子は、ドアを開けて外の世界に目を向けて、もっと上の学び、大学やビジネスや研究や専門学校など、その先に道が広がっていく。専門教育の場合は、輪を作って道を広げて、新しい道を少しずつ作っていくようなイメージ。
- ・既存の研究や文献に該当する一覧表があり、それらもたたき台にしていただけるとよいか。
- ・課題解決の力は、学校ごとに発達段階で分かれていていいと思うが、分かれていくものなので、横並びじゃない方がいいかもしれない。
- ・ライフデザインの力については、小学校から高校まで一貫・横並びでよいか。小学校段階から、ライフデザインを意識していく上で、観光は非常に役に立つのだという形で示すことはいいと思う
- ・どういう切り口でどこまでの範囲（地域）を見るか、そのような分け方をしてもいいのではないか。小学校段階では、世界全体をというところはちょっと違うのかなと思われ、中高生になった時には、自分の地域だけでいいかということそれも違うと思う。
- ・マトリックスでこの箱の中に埋めていくというこの表現方法に拘らずに、矢印の太さが年齢発達に伴って段々と太くなっていくとか、あるいは、スパイラルモデルとかもあり、この1種類だけで入れ込むというのは、無理があるのではないか。
- ・小中高の積み上げスパイラルでもいいですし、積み上げが点々で専門学校としての商業科として入ってきた場合、この専門教育が生きてくるのではないか
- ・区切るよりは、段階的に広がっていくのか、濃淡があるのか、当然、小学生と高校生などでは、グローバルな視点に差異が出てくると思うので、もう少し上手い整理の仕方があるのではないか。
- ・小学校などの研究構造図などで使われるように、小中高、専門教育が竜巻型のフレームの中で、スパイラルに学んでいながら、総合的学習のコンセプト、デザインも、情報収集、課題設定、分析などで回っていくので、そのようなイメージで、竜巻型のフレームワークでランドデザインを整理してみるのはいかがでしょうか。
- ・最終的に全体像を俯瞰できる（見えてくる）ことが大事だと感じており、なるべく分かりやすく表現していかないと、生徒たち、先生方、業界の方、保護者の方等に、観光教育が何か伝わりづらい。



- ・これは基本的に、教える側の立場の目的。最終的にまとめる段階で、小中高の段階での、子ども目線や本人の感覚で、これができるようになるという一言が何かあるとわかりやすい。
- ・児童や生徒や学生は何を学べるかについては、ここに入れることではなく、そういう目線みたいなメッセージみたいなものが意識されるように、何か別のフレームであってもよいか。

<⑥具体的な個別の文言修正>

- ・「観光分野への興味関心を自分ごととして喚起」とあるのですが、「観光分野」というのが、あまり明確でないと感じる一方、「観光産業」とはっきりと入れてしまうと具体的すぎてしまう。また、「自分ごととして喚起」という言葉がなかなかイメージつかない。他の案が思いつかないものの、今の表現はストレートすぎるような気がする。
- ・他者理解や社会課題の対峙の経験を通じてとあるのですが、「他者理解」というのは、観光を通じて人と結びつくということでの他者理解もあるとは思いますが、文言自体に、「国内外の社会に」というぐらいで、「外国」という言葉は入っていない。そうすると、異文化理解とか国際理解という言葉は、他者理解の中に含まれるのかどうか気になる。
- ・「異文化理解」という言葉もありましたが、「自文化理解」、自分たちをそもそも知ることも必要で、自分たちのまちに何があるかを一旦整理する視点も重要。
- ・「ワークライフバランス」という言葉が小学校教育ではなじみがない。「余暇」等の言葉に変えてしまう。
- ・もう少しグローバルな理解、世界に目を向けるということ、総合的に自分が住んでいる地域と他地域を比較する、視野が開けていくような言葉があれば、それを入れていただくと良い

■「観光教育で育む力の展開イメージ」の素案に関する、第3回分科会のご意見

論点	「観光を通じて、持続可能な社会を創るための資質・能力」として、各発達段階で何を意識し、連動させるとよいか。(以下、議論のたたき台)
小中	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光の意義について理解を深め、日本及び地域の愛着と誇りを持つ</li> <li>・地域の魅力を価値に変える</li> </ul>
高校（普通科）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅行に関わる価値観、美意識、教養を高める</li> <li>・観光に関する気付き力、問いを立てる力、解決する力を高める</li> </ul>
高校（専門学科）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光の価値と方法の基礎能力 (人々の交流を促進したり、地域の魅力を価値に変える理念や方法など)</li> <li>・プロデュース力、俯瞰力</li> </ul>

<①全般>

- ・一つひとつの言葉の定義が必要。
- ・やはり言葉の定義が重要。観光という言葉自体も、各学校の先生、子どもたち、地域の人、それぞれによって価値観が違うので、どういうことが観光なのか、言葉の定義をしっかりと立てることが、非常に重要。

## <②小中学校>

### 【地域の定義】

- ・「観光の意義について理解を深め」の「意義」は何か、「日本及び地域の愛着と誇りを持つ」の「地域」が具体的でない（「ふるさと」が決してそれが良いとは思わないですが、地域というのが言葉としてあいまい）、「日本」と「地域」が並列になるのかなど、精査する必要を感じる。
- ・中学校では外国、世界のことを学習するので、「日本及び地域」の地域に外国も含められたい。
- ・取り組みのイメージとして、他のものと比べるのであれば、他地域の活動や事象と比べるという意味での「他地域」は、「外国」など他のものという言葉が入っていると、より分かりやすい。
- ・小学校では、他の地域と比べてどうなのかというところがあり、それを元に、このまちの日本での位置づけ、世界での位置づけについて見つめて考えるということが挙げられる。

### 【地域の魅力を価値に変える】

- ・「地域の魅力を価値に変える」は、とても良いと思う。このまま、この言葉を使っていたきたい。はっきりした言葉の方がわかりやすいと思う。
- ・「地域の魅力を価値に変える」は、変える力が何に活用できるのかを考える必要がある。「地域の魅力を価値に変えることで考える力を養う」と変えるなどしなければ、このままでは資質・能力ではなくて地域の魅力を価値に変えるそのもので終わってしまう。高校ではより具体的な言葉で表現してあるので、「価値に変える」とどんな力が育つのか、表現できると良い。
- ・小中の分科会では、故郷のよさ、故郷が好きだ、故郷の良いところを自慢しようというところで止まってしまう。これからの観光教育を考えた時には、自分の地域の良さを地域の魅力として価値に変えていくことをしなければならぬと話が出た。地域に愛着と誇りを持つということは今までもやられていることだが、そこから高めて地域の魅力を価値に変えるという教育に移行していくことが大事だという意見が多く出された。
- ・観光というのは人をもてなすことで、自分の地域と他の地域の交流があるところに観光の良さがあるので、自分の地域を知って良いところだけということでは観光教育とは言えないだろうという意見があった。比較や自分の地域を自慢するということが全国でもやられていると思うが、まちづくり教育と観光教育の違いとして、他の地域からはどのように見られるか、ということも重要。
- ・交流する価値という話だろうか。自分がよその場所に旅行して、あそこであんなことがあったと経験して帰ってきて皆に話し、よその地域の人がやってきたときに、「おたくはこんなですね、うちはこちらなんですけど」、というような話があるということか。
- ・自分の地域をブランディングしていくことで、他の地域から見たときに魅力的に感じてもらうためにどうするかということだろう。（子どもが大人になっていくとき、よその地域を見る目、例えば、親だけを見ているのではなくて別の大人を見るのと同じように、自分の目を鍛えるということも含まれる。）
- ・フランスやイタリアが、自分の地域にブランド品があり、それが価値になっている。観光がある前まではブランド品を生み出せるまちだという価値は地域にとってなかった。ただし、ブランド品を生み出せる歴史のあるまちなのだと、世界の人があこがれるようなブランドを生み出せる国になったのは、観光立国を進めてからだと考えて、理解できることが価値なのではないかと思う。自分たちだけが良いと思うだけではなく、交流によって自分の地域がすごい価値を持っているのだということを実感し、発信していくことだと思われ、これが観光教育の良さではないか。

- ・(高校段階での学びを念頭に置くと) 小中学校の段階での学びに求めることとしては、人前で話せて、質問して答えてもらう、大人に教えてもらうことなど。自分の地域の観光資源に触れて自分で感じてもらうことも必要。
- ・プレゼンの力をつけたり、自分たちの市町村の材料を理解したり、各市町村とも観光に関する内容の比較ができたなど、小学生のうちに基礎・基本を身に付けられるような素材を取り扱ったら良い。

### 【楽しさ】

- ・小学校では、他の地域と自分の地域を比較しながら、その特性について学ぶことがまずあって、そこで楽しさを学んでおかななくてはならない。

### 【中学校 ～プランニングする力、旅行する力～】

- ・中学校では旅行をプランニングする能力について、授業の中で取り上げている。結果的には自分が住んでいるまちを見つけることになる。見つめるためというよりは、他のまちに旅行に行くとしたらどのようなプランを立てるかということがメイン。中学校の社会の基本の「日本を見つめよう、世界を見つめよう」ということとともに、「自分の地域にはどのような観光に関わる仕事があるのか」という両面から観光業を考えていくことができる。
- ・プランニングする力、旅行する力の醸成につながる。例えば、どうやってスマートフォンを利用するのかとか、どうやって電光掲示板を見ていくのかとか、情報をどうやって処理するかという力は中学生で学びをスタートする。

### 【中学校 ～キャリア教育と課題解決活動～】

- ・中学校段階になると職場体験が入り、キャリア教育という意味も含めて、観光業に関わる仕事はどのような仕事があるのか、観光に関わるステークホルダーはどのような人たちなのかを知っていこう、この地域の中でどのような人が観光に関わる仕事をしているのかを見つけよう、ということが挙げられる。
- ・小学校で他の地域と自分の地域を比較しながら、その特性について学んだ後、中学校で引き受けたときには、それと仕事という関係を学ぶということがあり、他方で、社会との関係を作りながら観光を学んでいけるように課題解決を進めていく必要がある。
- ・中学校の中で、観光という仕事がどの産業にもつながることをイメージして高校に入ってもらうことで、高校で何と何を組み合わせ作り上げるとか、どのような人にアプローチするかなど、少し専門的なことをしていくことができるのではないか。

## <③高校普通科>

### 【文言に関して】

- ・高校の普通科に関しては、旅行と観光を使い分けており、その使い分けがはっきりしているのか気になる。
- ・「観光に関する気付く力、問いを立てる力、解決する力を高める」について、「関する」ではなく、「通して」が適切ではないか。

### 【気付く力】

- ・観光に気付く力は、先ほどの話を聞いているとわかるが、漠然としている。

- ・「観光に関する気付く力、問を立てる力、解決する力を高める」は、観光を通じて、自分が何を面白いと感じるのか、自分はどうやって生きていくのかに気付くところではないか。
- ・価値観や美意識をいかにして磨くかということ、何かに気付く力というのも非常に抽象的なのは、気付いたうえで具体的に何をするのかというときに、普通科に在学しているうちはその成果を求めず、その後の発展というところを意識しているのではないか。
- ・普通科が観光教育でどのような役割を果たすかと考えたときに、中途半端という語弊があるのかもしれないが、真ん中にある存在か。小中において、観光として地域を発信する力を身に付けて、地域と連携していく楽しさを知った上で、高校の専門科においては具体的にプロデュースしていく力を身に付けていくという状況の中、普通科は大学や専門学校で本格的に観光をプロデュースしていく機会が想定されるので、普通科では具体的な観光の学びではなく、生徒自身が次の進路に向けてどういう力を身に付けていくかという、目標の達成が個人に帰結すると感じている。
- ・普通科の大学との連携という観点においては、高校の学びが大学の研究内容との関連が少ない中で、大学の教員も高校で学んできたことが、直接大学の研究につながらないことに戸惑いを感じている意見があった。高校普通科で観光教育を行う中で、その連続というものをかなり意識しており、観光を題材としまして様々なレポートを書かせ、現地を見学するなどの作業を続けると、やはり高校生は授業の枠にとらわれずに様々な観点でモノをみる視点を得ることができる。
- ・普通科は個人としての自分をどう旅とつなげていくか、という課題解決が必要で、それができなければ大学での学びにつながっていけない

#### 【対自己と対課題】

- ・普通科の方は、「旅行を通じた価値観」にあるように、自己について考え、自分がどう生きるか、どう学ぶかなどの、自分に向ける部分も重要。一方で、小中でやってきた「地域とのつながり」をどう担っていくのかという視点も重要で、それが2番目の「観光に関する気付く力、問を立てる力、解決する力を高める」につながる。

#### 【アウトプットのレベル感】

- ・高校では経営企画につなげ、データを見て、インバウンドやアウトバウンドへの訴求検討につなげられるのではないか。

#### 【海外も含めた魅力の伝達】

- ・発達段階別には、高校においては、地域の魅力を知っていて、常に日本だけでなく海外の方にも伝える、そのために各外国の特徴を知っている、それ以前に日本の方にしっかり自分の地域の魅力を伝えるというところも教えていかなければいけないと思っている。またそれに伴ったアウトプットに関してもトレーニングしなければいけない。

#### <④高校専門学科>

- ・専門高校としては横串を刺していけるような、例えば、高校を中心に工業、農業、福祉といった専門高校に横串を刺していけるのが課題か。
- ・今まで中学校で学んできたものを、高校専門学科の授業の中で楽しむということをどのように伝えるかが重要。それが、消費を生んで生産するという、働き手の立場だけでなく、自分が消費者になるという感覚も育んでいくことにつながると感じました。今までの高校専門学科では、どうしても

職業の方に目が行ってしまい、サービスを受ける側と提供する側の両方の立場を学ぶということではできていなかったと思われる。教員の立場としても、教員と生徒の立場の両方を考えなければならぬと同様に、「相互理解」を発達段階で意識させていくことが必要。

- ・専門学科は職業としての観光の素地を身に着けつつ、消費者目線で考える力を育む必要がある。
- ・地域の魅力を知っていて、常に日本だけでなく海外の方にも伝える、そのために各外国の特徴を知っている、それ以前に日本の方にしっかり自分の地域の魅力を伝えるということも教えていかなければいけない。またそれに伴ったアウトプットに関してもトレーニングしなければいけない。

#### <⑤接続性・連動性>

- ・小学校は自分との関わりの中から学習課題を創出していて、テーマについて観光が存在する。高校にいくと身近なテーマであるものの、おそらく地域というよりは個人、自分の将来のためという側面が強くなるため、小中と高校の関連性が言葉としてもうちょっとわかりやすくした方が良いか。
  - ・高校普通科と小中学校との間に飛躍があると感じているので、つながりがあると分かりやすい。
  - ・小中と比べると、地域からいきなり個人に目的が変わっているため、そのあたりをつなぐ言葉が必要。
  - ・高校の方で並べられている能力は恐らく小中も含まれている。言葉につながりがないだけだと思うので、そこを改善できれば良いという印象を受けた。
  - ・連携という意味では、小中で探究学習が始まっており、それに絡めながら高校での取り組みがあれば良いか。
  - ・最終的には、プロデュース力を身に着けた人材、広い視野を持ち理解できる人材、観光の考え方を持った人材を育成していこうというのが、最終的な目標か。
  - ・高校段階で「観光に関する気付く力、問を立てる力、解決する力」を高めた後、それをどこで発揮するのか、それは社会であり、社会での役割をどう還元するのか、地域から学んで、自分に落とし込んで次は社会に還元するという相互作用を意識していけると良い。
  - ・観光を勉強していきますといっても、ホテルなどのイメージしかない子どもも多くいるため、そのような点をどう払拭していくことができるかが今後の縦の連携につながってくるか。
  - ・小中学校の段階では、人前で話せて、質問して答えてもらう、大人に教えてもらうことなどです。自分の地域の観光資源に触れて自分で感じてもらうことも必要。中学校で、観光という仕事がどの産業にもつながることをイメージして高校に入ってもらうことで、高校で何と何を組み合わせ作り上げるか、どのような人にアプローチするかなど、もう少し専門的なことができる。
- 、高校で初めて観光を知ると、小学校と同じ地点から入ることもありえる。全体をひとつの絵に描く一方で、どこからスタートしても良いところもある。皆がこういったことは知っておきたいということもベースにはあるか。

#### <⑥その他>

- ・兼六園でのガイド研修を経験した子どもたちは、コミュニケーション能力やおもてなしの心（例：暑い日に日陰に誘導、水たまり回避）が伸びている。
- ・人間形成能力や将来設計能力につながる。

## 5. 求められるプログラム要件

(※別紙：「事前にいただいた意見」も要参照)

### ■学習づくり・プログラムづくり

#### <①指導視点・指導技法>

- ・子どもの自己肯定感の低さや、その背景としての完璧主義の存在に関して、子どもに自由にしていよと言いつつ、教員が口出しをして教員の意図する方向（≒学校の方針）に子どもたちを寄せていくシーンをよく見るとともに、その一因となっていると感じる。
- ・教員はきっかけを作り、見守りつつも突き放す場づくりも大事。
- ・観光教育として授業や教室の内外で様々な場づくりをしてきっかけを与えていくことが重要
- ・高校の場合、実質は1年半から2年という期間の中で、様々な経験や、主体的に生徒がどう動くかというところで、色々な場づくりを、我々大人が作るにより、生徒が考えることができる。
- ・アクティブラーニングが言われている中、ただ覚えるだけの学習は避けたいところ。知識を持った上で議論できる場や教材を作っていくことが重要。調べながら自然と何か1つのものを作り上げる、各々が調べた結果をまとめるような探究的な取り組みができるとよい（例：地域食材で作る駅弁）
- ・子ども側（学ぶ側）も、大人側（教える側）も、一方向の学び・教授に留まらず、双方向のコミュニケーションが重要。
- ・「なぜ自分のふるさとは観光で人が来ないのだろう」というクリティカルシンキングな学習が少ない印象もある。一方で、シャッター通りを題材とした学びでは大きな労力が伴ったようだ。
- ・今の高校生世代が、働き盛りになる2050年には経済規模が縮小し、海外資本が入り込む圧力が高まっているなどの状況も視野に、日本のあるべき姿を一緒に考えていこうと、主体的に考える場づくりを観光教育の文脈で設けることも検討したい。
- ・コロナ禍で外国人観光客の受け入れに消極的なアンケート調査がある。受入側の在り方に関する観光教育も今後検討が求められる。
- ・多文化共生、ダイバーシティを目指す過程で、特定の層に「我慢が生じていないか」を気に掛ける視点も持ちたいところ。例えば、観光地においては、観光客を逆に煙たがる教員もいると思われる。
- ・観光庁から出ていた観光地域づくり人材育成のガイドラインには、リーダーに必要な能力として、企画戦略・分析計画力・組織づくり・PR・商品化・事業化が挙げられている。当該内容を小学校に当てはめると、企画戦略は観光における基本知識を学ぶことや地域資源を調査し、それをどのように創造するかを考えることであり、地域の人とのディベート、次に県外の人とディベートし仲良くなることで県外に行きたい気持ちも強まるのではないかと。最初から県外を考えると小学校教育においては飛躍しすぎる印象もあるので、まずは地域から発信していくことも1つの方法。
- ・高校では、受験・進学を通じて、近い学校にたまたま観光を教える学科があるとなると、そこにしか行けない・行かない子どもがいる。ある意味、強制的に入ってくる子もいるなか、どのようなモチベーションを持たせて、中学まで学んできた観光の内容を磨き上げていくかが必要。

#### <②観光の範囲を理解した上での学び>

- ・普段高校生や中学生を見ている中で、結局のところ観光産業が何かを分かっていると感じる。そして、観光との関りがうすい職業が観光にどう結びついているのか子どもにはイメージしづらい。
- ・観光資源を見つけて、それを基に観光企画を考えるということはやられるが、観光業はそもそも誰が観光関係者なのか分かりにくい。どこからが観光業なのかという境目がはっきりしているわけではない。我がまちの観光業ということで、誰が観光業の関係者なのかというステークホルダーを理解する

ことが大事と感じている。

### <③子どもたちがわくわくし、楽しんで取り組める学び>

- ・小学校の時から決められたことをするのではなく、わくわくさせながら、広げていくような流れみたいなことがあればよい。(サッカーには純粹にボールを好きになるゴールデンエイジの概念がある。)
- ・取り組みが机上の活動だけではワクワクしない。実際に現場を見ながら、変化を見ながら、人と出会いながら、進めていけるように小学校段階から教育として展開できれば面白い。
- ・昔ながらの教材は見て「こうなんだね」で終わってしまうものが多いが、そうではなく、実際に行つて心が震えるような面白い仕掛けやツールがあると、子どもたちも飽きず、行ってみたいという気持ちも沸く。そのような教材やツールがあると良い。
- ・高校専門学科の授業の中でも、観光を楽しむことをどう伝えるかが重要。楽しむことで、消費を生んで生産するという、働き手の立場だけでなく自分が消費者になる感覚も育てていくことにつながる。今までの高校専門学科では、どうしても職業の方に目が行きがち。サービスを受ける側と提供する側の両方の立場を学ぶということはできていないようにも思われる。「相互理解」を発達段階で意識させていくことが必要。

### <④事前準備・事前インプットの必要性や取組方法>

- ・活動面と知識面の2つをしっかりと身につけると、もっと幅が広がるのではないかな。
- ・世の中のどこに何があるかを学ぶ機会が少ない。良し悪しは別として、議論するためにはある程度の知識が必要であり、知識がなければ出かけた気持にならず、その機会の創出が課題。
- ・知識から入るときもあれば、活動から入っておのずと知識を学ぶ時も、両方ある。一概にすべてを知識からではなく、テーマを与えて、やれるだろうというところで、やらせているのも事実。
- ・現実を伝えることも大事。地元の問題点をするところから始め、学校間交流や現地訪問を通じて他地域の問題点を知り、それぞれがお互いの問題点を提起することで、新たな問題点や改善点を知り新たな知識や交流が生まれてくる。そこで社会との関わりが生まれる。・社会の中で生徒たちがきちんと学べる準備をするというところが、日本では欠落している気がする。生徒を連れて志賀高原に行ったときは、無職の高齢者がどうやって暮らしているのか調べたいとして、調べるための相当な準備と、それを補佐してくれるボランティアグループを用意して、生徒たちがヒアリングをしに行つて、帰ってきて自分たちが得た学習の成果を学校の中で討議していく形になった。
- ・観光のツアープランを検討する際など、現在は予備知識なしに生徒が各々調べてきているが、観光に対し、どのような情報源をどのような切り口で見ることが分かると良いのではないかな。小さい頃から家族旅行で海外を経験している子どもは、どのような情報源をたどつて、どのような切り口での視点を入れるべきかを何となく理解しているように見受けられる。面白い内容を取り上げている生徒は、インターネットやガイドブック以外の資料も当たっている。

### <⑤他地域との比較やファクトチェック>

- ・自分の地域と他の地域の比較が大事であり、内に来てもらう視点(インバウンド)だけでなく、外に出ていく視点(アウトバウンド)も重要。
- ・自分の町の観光資源を知った上で、他の市町村と比較・評価することも重要。
- ・他者理解や他文化理解、自文化理解に加え、グローバルな理解、世界に目を向けるということ、総合的に自分が住んでいる地域と他地域を比較することは、自分の成長や地域の活性化のために必要なこと。両方を見ていくようなスタンスは、個人の成長にとっても、観光が持つ力の中でも非常に重要。

- ・地域情報に対するファクトチェックをどこかの段階で取り入れることができれば良い。東京と宮崎の高校生でオンライン交流する機会があり、宮崎に東京の高校生を連れてきたという前提で、東京の高校生は宮崎のどこに行きたいかを考え、宮崎の高校生は宮崎のどこに連れていきたいかと考えた。結果を見たら両者のギャップが非常に大きかったことが印象的だった。
- ・ファクトチェックをマンツーマンで行うことも志向したいところ。全国一万以上の小学校でやれたら盛り上がる。
- ・観光は産業とは違って全国各地にどこにでもある。成功している地域もあれば失敗している地域もある。どうやったらこの地域の観光がうまくいくか、他の先行事例を知りたくなり、自地域の学びだけに陥ることは無いのではないかな。

#### <⑥魅力を価値に変えること、誰かの役に立つ、という落としどころ>

- ・高校生が外に出ることへ理解のある企業や行政、団体とうまく連動し、子どもに社会を見せて学ばせて、同時に地域を良くしていけたらよい。学校側と外部でギャップがある場合もあるため調整は必要。
- ・地域の魅力に関しても、小学校段階ぐらいいはあれもこれもいいねという感じで、ランキングや絞り込みができない学習が展開して、いわゆる自己満足の「良かったふるさと学習」になってしまう。観光教育をより磨いていくためにも、地域の魅力を価値に変えていく視点、1ランク上に上げないと新しさが無い。特に、小学校の高学年、中学生ぐらいいの段階になると、より高めていく方法が求められる。
- ・高校でも「地域理解」という言葉があり、自分の住んでいる地域のことだけが分かっていたらいいとすると、これがいい、これがいいと羅列して終わってしまうので、やはりどこかで他と比べるところの視点が必要。「地域理解」が段階毎にあって、その後「国土理解」という形で、他の地域を理解することにより、自分が住んでいる地域の特色を知るといった方がいいのではないかな。国土という言葉が出てくれば、地理関係の先生方は飛びつくかもしれない。
- ・あれもこれも良いと牧歌的では観光資源にならず、磨き上げる視点(ブランディング)も重要になる。
- ・現在の観光地として思い浮かぶ場所には、魅力があるから人が集まるので、そうしたところに行って体験することが、楽しかった嬉しかったという感情を生み、今後のステップに繋がる。
- ・魅力をブランディング化して、価値を高めていくような授業・交流にまでするには、自分の地域の魅力を挙げて観光のPRをしたところに対して何か言ってもらっただけでは価値の違いを見つけれない。そのあたりを追究する余地がある。
- ・観光の成立要件として、観光資源の魅力化、サービス、交通の整備、これらが重要な3項目であり、これらの視点で違いを見てあげると、観光客から見た人気のある観光地や観光資源が見通せるようになるかもしれない。
- ・絶対的な価値もある一方で、相対的な価値にも気づいていく、それが、稼ぎの種にもなるし、自分の守るべきものにもなる(例:北海道の雪質は世界一)。
- ・長野県で信州学というものを総合学習でやっていて、オープンキャンパスでやってくる中学生に我が町を紹介しているようだ。高校生なので、自分たちが住んでいる地域のデータをきっかけに見てみよう、全国のデータと比べてどうかということをやられている。ゴールが必ず決まっているらしく、産学官のどこかと絶対に連携をして、自治体に陳情するところを最終的なゴールとしているようだ。なぜそれをゴールにしているかということ、高校生が「地元の役に立った」と思えるところにつなげると伺ったことがある。「誰かの役に立つ、地域の役に立つ」というところについて、資質・能力の部分につながってくる話かもしれないが、1つの視点として必要なのではないかな
- ・「カリブ観光教本((財)国際観光サービスセンター編著、2002年)」を見ると、話題提供でも言及いただいた、経済の観点がすごく出てくる。自分の国がどれだけ観光産業で利益を出しているか、それが



経済の点だったり、観光保全の点だったり、地域について構造的に見ていく視点があって、そうするとやはりお金のことは避けられない。むしろお金・経済を理解した上で、そのために何ができるかを考えていくと、地域貢献や役に立つという話に結び付く。

#### <⑦他者への貢献を同時に実現する学び>

- ・観光甲子園とかは実社会において大人向けに自分たちの学習成果を発表する場。逆に、子どもが下の学年の子どもたちに自分たちの旅行商品企画をわかってもらえるようなプレゼンをする発想もあってよい。
- ・高大連携を見ると、大学のゼミ生徒が、高校生に街歩きのガイドをしたり、音を伝えることはよくやっている。高校でも高校生が中学生を教えるなど、オープンキャンパスの時などに、中学生に勉強を教えるとかはあると思うので、それは、上の子たちにとっても、いい学びの機会になり、下の子にとっては、分かりやすい内容になる。
- ・専門高校は比較的時間があふり、材料もそろっているのも、もしかしたら高校生だからこそ、つなげる（コーディネートをする）役割ができることもあると思われるとともに、そういう能力を身につけてもらおうとよいか。
- ・観光や地域振興に問題意識を持つ地域の人々はアクション（例：観光大臣会議）をおこなっているが、他の住人がついて行けていない意味でも、子どもの頃から教育していくことは重要。

#### <⑧デジタルツールを活用した学び>

- ・オンライン慣れしているのは教員より生徒の方で、オンラインとリアル併用の観光教育の中で考えていく必要があると感じている。
- ・ホストタウンミーティングで、日本各地の子どもたちの交流（地域の魅力を見出し伝達）が可能となった。
- ・オンライン上でも観光は展開されており、その観光も高校生に経験してもらうことは重要。
- ・オンラインと観光教育の関わりも考えられるべき。オンライン学習企画を先導する事業者も存在する（例：JTB）。
- ・全国大会やコンテストなどを、オンラインやハイブリットで実施すると、交流が生まれて非常に意義があると思われる。
- ・オンラインでの開催スタイルでのイベントやミーティングの実績が生まれている、今後、オンライン上での生徒交流ができるのではないかと。
- ・全員がコンピューターを持つ GIGA スクール構想においては、うちの町の観光業に関わっている人はこういう人がいるということについて、小学生同士、中学生同士で話をしてみるだけでも意味がある。そうして我がまちの独自性を見出し、それが町に対する自己肯定感につながれば、そこに住む子どもたちにとってもやる価値のある観光教育につながっていくのではないかと。

#### <⑨学外組織・社会の力の活かした学び>

- ・各成長段階において、高校の体験入学など、次の段階における観光教育を体験できると良いかもしれない。高校ではこんなことを学んで面白いということ意識の下、基礎をしっかりやっておいてもらうと、強く思いとともにより成長できるので良い。
- ・年次を超えて一緒に行動して発表会をしたり、体験入学をしたりと、それぞれの学びの成果を教え合うことにより（上の学年から下の学年だけでなく）、人に伝えるという経験や他の学年のことを知るきっかけになる。

- ・大人が認めてくれることの成功体験を作り出すことが重要（例：イラストが観光施策において利用される経験。）
- ・役職ある方と交流をしたり、話を聞くことも様々な学びが出てくる。
- ・外資系の観光事業者と連携し、5つ星ホテルでのサービスマインドを学んだり、多民族国家ならではの集会や文化、人とのかかわりを身につける実習をしている。
- ・地域と共同で観光教育を実践する際、生徒が「人手（ボランティアの人員）」と認識されかねない。活動趣旨はあくまでも、教育目的（例：学びという点で生徒が地域を活用して自分のキャリアや自己に向き合える）が第一であると理解いただくための、地域の方々との地盤形成、関係性づくりが最初に必要な
- ・観光教育ソリューションを提供する民会事業者では、提供する行事や・旅行・研修などが、生徒の資質・能力、コンピテンシー、暗黙知、非認知能力といったものをどのくらい変えたのか提供する側としては見せていくことが必要と考えており、デジタルシステムでデータをみえる化して評価するようにしている。
- ・学校現場に出前講師を派遣する事業を続けて、優れた観光関係者が出前授業に行くが、教員は全部丸投げ状態で自ら学ぼうとせず、「いいお客さんが、いい話をしてくれたね」で終わり。実際の業界と接点があっても、学校の先生方が本気になれないところに、メスを入れる必要があり、仕組みの問題として捉えている。

#### <⑩グローバルな活動・国際交流>

- ・国内だけで完結するのではなく、国際交流を伴う活動もまた重要
- ・外に出ることの楽しみ知ると、海外に興味を持つ率も高くなり、実際に外に出たいと発言する生徒も増える。そして、外に出て地元に戻って来たいという生徒もおり、様々なパターンで生徒の興味・関心が高まる。
- ・子どもたちが外国に出ていくことに関する教育があまり多くは挙がっていない印象。
- ・海外からの実習生との異文化交流で、国際的な感覚を養うことができる。
- ・留学生に向けて我がまちを紹介してもらい取り組みもできるのではないかと。留学生には日本語が流暢な人が多く、将来は日本で働きたいと思っている優秀な人材がいるが、日本に溶け込もうと思っても、他の日本学生と関わる機会がなかなかないようだ。留学生は、学校の授業で専門的なことを議論する以外には活動の機会があまりなく、もっと日本のことを知りたいので活動の場を広げたいこともあるようだ。
- ・小中の時の国際的な感覚が、観光に興味を持って自分で学んだり、それをスキルにして国際的な問題に取り組んでいこうということで大学を選択したりすることはあるのではないかと。ニセコ町だと、夏休みに入ると、小中学校では1か月休みを取って旅行に行かれる方が多く、そういうことが、自然に観光に興味を持つことにつながるほか、外国人の役に立つ仕事につきたいなどの感情を抱くことにつながっていると感じる。

#### <⑪将来の観光需要者を創造する視点>

- ・外に出て旅を楽しむことが、経済的・社会的に世の中を動かす意味でも、旅をする人・したい人を育てることは重要。
- ・実際に旅へと連れて行けば、自ずと関心は高まる。機会が必要。
- ・旅する人を育てるという視点では、複数時間の授業を通じて生徒自身が旅について調べだし、いつのまにか、旅をする人、旅をしたい人になると感じる。何がきっかけかは生徒によって異なり、それが

科目を通してなのかは確認する必要がある。

- ・専門学科では専門教育が行われるため、導入などでは旅行者目線の手法を採る場合もあるが、地域理解や旅人創出は目的ではなく、結果論として達成されている可能性がある。
- ・インバウンドによって地域の観光資源を見直す、活かすなど、「稼ぐ」という商業ベースの観点が強かったが、未知の場所に出かけていく力を養わなければ、日本は観光先進国にならないのではないか
- ・観光街づくり教育は地域資源を見直す、誇りを持つ、良さをクローズアップするということだが、その子どもたちが外国に出かけていくという視点での学習はなく、この部分も守備範囲に入るのはないか。

#### <②進路・キャリアの視点>

- ・職業観に関して、観光教育を経験をした子どもたちが、観光業や関連産業に従事する流れをつくる視点も必要。
- ・高校生のキャリア教育と観光教育をつなげることについて、専門学科は実践しやすい一方、普通科では具体的にどのように取り組むかが検討課題。
- ・キャリア教育に関しては、その先を見据えて大学選びをするというような、従来の進学指導からは変化している。現実、高校と大学でやっていること（や活動で志向すること）が異なる実態があり、ギャップの解消が必要。
- ・大学進学や専門学校への進学を経て、観光に携わるキャリアを考える普通科の生徒に対して、どのような教育ができるのか議論が必要。
- ・水産高校では、船員の人材不足を背景に後継者育成が重要な視点。観光教育においても共通していると考えており、出口指導を強化する（魅力ある職業を紹介する）ことから始められる。

### <⑬日本の学習環境の強み>

- ・世界的にあって、日本はとても稀な国で、特に先進国は、町の中を歩くのは今でも危険。ニューヨークも少しは良くなったが、ニューヨークで生徒を町の中に出して、意見を聞いてきてというのはすごく難しい。そのために、どういう仕組みを作るのかという教員のアクションリサーチが「世界男子校会議」で大きなテーマの1つとなっている。

## ■実施枠

### <①学校教育における実施枠>

- ・地元の観光ツアーみたいなものは課題研究や授業で取り組む。
- ・学校設定科目で実施できる。
- ・基礎科目としての位置づけ。商業高校の観光教育の場合は、比較的、いくつかの科目を構成しながら専門性を磨き、実学につながられることが強み。
- ・部活としての本格的な活動。
- ・商業科以外の専門科でも観光教育は実施できる。幅広い視点で専門教育と観光教育のつながりを構想すべきか。
- ・自身の学校でも、2年後には観光ビジネスを取り入れるが、最初は全員履修させようという声があったものの、今はそれが消えつつ観光コースで観光ビジネスをやってみる話になっている。観光から学べるものはすごく大きいのでもう少し広げていきたい
- ・普通科には「探究」の時間があり、継続的な取り組みのために重要と思っている。
- ・課外活動で行うものを、特別活動として実施できないか。修学旅行やHR（ホームルーム）のように、特別活動に入れられると制度化できる。
- ・学校指定科目としての実施（私立ではやりやすい）や、その前段階として、特別活動に位置付けて年間スケジュールに入れ、選択式にしていく方法がある。（例：淡路島・石垣島・大島では郷土芸能として取り組む。）
- ・観光教育に関係する試験（例：地理検定）をきっかけに観光への興味を醸成する方策が考えられる。
- ・高校は3年間あるものの、実質的には、かなり短時間で育成しなければいけない。もし、観光に興味を持てば、例えば、高校であれば、修学旅行があるので、修学旅行を生徒がプロデュースしたりすることで、観光について小中で学んできたことが活かせる。
- ・修学旅行における自主研究の事前事後指導としての導入は、一例として理解されやすい。
- ・修学旅行等に他教科の先生の視点を加えるような形にしたら、観光教育が分かりやすいものになる。社会科教員がプログラム検討を担うケースが多い印象。
- ・カリキュラムとしてリベラルアーツを科目の枠で展開することが難しいのであれば、教科の枠組みにとらわれずに物事を考えていくことの訓練ができる場が考えられる。例えば、当校は私立だが土曜日の授業をやめており、その時間を有効に使ってもらうことで人生観を養ってもらうことを期待していると同時に、その時間の使い方をどう発想してもらうかも課題として考えられる。
- ・安全性の問題で、わがまちの探検などを学校から止められることが多く、学校では外に出る機会がとても少ない状況。そのため、(学校外において)自分で一人旅に出るなど、旅に出ることを自分で計画立てて味わうことが必要。それがあってはじめて観光や旅が楽しいのだと思えるのではないか。
- ・県やNPOと協力し、「子ども観光大使」事業を実施してきた。観光講座への参加、検定問題への合格、はがきなどで良さを発信することが条件であり、県知事から子ども観光大使として認定をしてもらえ。全国の先生方から評判となり、各地で子ども観光大使の取り組みが実施されるようになったが、予算の関係で終了となってしまった。

- ・オンライン上で気軽にやれるような人とつながるようなプログラムと、それを誰もが実行できるようなテキストができれば良いのか。
- ・観光庁が関わる、ツーリズム EXPO を観光教育でも活用できるようになるとよい。大きな箱で教員や学生が集まる場、発表できる場を提供いただきたい。

## <②教科学習との関連・連動>

### <総論>

- ・教科学習と観光には関連する内容が様々な場面で存在する。観光という観点で、教科学習を深めていくと面白いことになるが、そうした思想の学習プログラムの検討は今後の課題。
- ・観光というキーワードは、幅広い分野・領域と関連（例：商業では商品開発、など）。
- ・専門学科のみに限らず、通常の教科の中でも広く考える力を養うきっかけになる。
- ・学習を通して、観光地や地理、飛行機の運賃計算など、観光の深い部分を知ることによって、観光にはこういう仕事もあるというような、様々な方向性を見いだせる。国語、社会などの通常科目と観光教育をつなげていくことも重要。（例：車いすを利用してどれだけバリアフリー化されているかなど、サービスの観点）
- ・運賃起算から、なぜ地方路線の金額が高いのか、利用率、過疎化の問題や廃線危機など、地域の課題が見えてくる。（旅行業取扱管理者試験の範囲なので、深く掘り下げずに終える可能性もある。）
- ・他教科の先生と連携する際は、教科担当のルーティンを崩したくないとなると、絶対に受け入れてはもらえない。当該教科の内容と観光教育との連動や、先生方の理解や人間関係も重要。
- ・ビジネスとしてどう感動させるかというシステムを考えるのが専門科。
- ・人が移動することで観光の現象が生まれるため、広い意味で考えると、様々な教科に関連してくる。
- ・観光は学問の対象であり学問ではないと言われていたこともある。逆に言うと、観光はすべてを内包し得るため、身の回りにあるもの引っ張り出して、組み立てることができる。
- ・基本的なことをしっかり学びつつ、他の科目で関係のあるものを観光につなげて、様々な知識を取り込んで、広い意味での観光につながる授業ができると良い。実際に生徒に体験、経験してもらえようようなことが観光教育として重要。
- ・観光教育を行う高校教員の取り組みを調べると、商業に次いで社会科で多く取り組まれている。中には理科や体育や家庭科、英語の教員もいるが、極めて少ない状況。それぞれの先生が問題意識を持って観光を使った教育を実施するものの、観光教育ではなく地域理解教育・郷土教育・まちづくり教育など、地域を素材に学習しているケースがほとんど。
- ・各教科で観光教育と関連する取組として何がやられているのか把握すると面白い。家庭科など、食と関連付けて取り入れている先生も意外という。

### <社会>

- ・社会科の中で経済を教える中にきちんと入れないといけないかもしれない。日本の将来が美しい話のようになれば良いが、現実にはそのような余裕はない。
- ・特に社会科については、学校の教育の現場において普及するためには、資料集が鍵と感じる。各地域での観光活動の様子や世界遺産など、様々な資料を網羅しつつ、これらの資料を使ってこのような授業をしているということを、実例として紹介することはできないか。まずは資料集で学校教育として取り組んでいる方たちに発信し、興味を持ってもらえると面白い。
- ・地域について総合的にまる掴みする地理学の方法論としての「地誌」があり、観光をフィルターにすると、観光地誌と名づけられ、主力教材の1つになりえる。

- ・地理の授業では、自分の住んでいる地域と他地域を比較する中で、観光が取り上げられる。自分の住む地域が他地域からはどう見えるかなど、客観的に地域を見ることについて、観光を通じて行うことはとても面白いこと。
- ・観光公害を教材化し、京都、白川郷と地元の事例を取り上げ、タイプの違う地域の問題を如何に解決するかを考えることで、他の地域にも応用できるのではないか。

#### <国語>

- ・社会科では感動は扱われにくい一方、国語では感動という言葉が扱えるので、彼らは観光の核心部分を学んでいるとも捉えられる。
- ・以前、修学旅行後の教育をどうしたら良いかと聞かれた時に、何が面白かったかのオチをはっきりとさせて、オチに向かって経験を説明するようにすると、皆で発表した時にオチを競いあえるよと言ったら、国語の先生方が目からうろここと仰っていただいた。物語をどう作るかということが重要なので、国語は国語でやったことを観光教育として発表していただくことは良いかもしれない。

#### <理科>

- ・理科教育では、一例として、天文観測、博物館訪問などが観光と関連する。
- ・観光学部の学生は文系なのでアイデアやマーケティングの話はよくするが、技術面でのアプローチは主だったものはない。

#### <数学>

- ・データ分析は数学で扱われている。

#### <美術>

- ・小中学生が旅行プランを考えて、絵で表現するという取り組みには、美術の先生と社会の先生が連携することが考えられる、

#### <体育>

- ・スポーツを通じた交流（スポーツツーリズム）など体育の中で観光を意識した部分が生まれるかもしれない。

#### <情報>

- ・ビッグデータを用いて情報系の学生が観光に関わるのが観光教育のひとつの形か。

#### <複合領域>

- ・防災の学びとしての観光の側面もある（ダークツーリズム）。
- ・環境教育は比較的根付いていて、特に小中ではリサイクル、自然保護活動、ESD、SDGsに移行して、熱心な先生方が学会、団体になっている。
- ・商業科では一般的と思われるが、知恵によって稼げることを普通科でも教えることも重要。（例：イーールドマネジメント。）
- ・日常社会での気づきは観光の重要な視点であり、教科での気づきとはやや異なる。（例：観光地の美味しいものと、自地域や日常生活で食べるものとの差は何か。）

### <③修学旅行>

- ・修学旅行を活用する際、目的地も多様化している。各地域の素材が活かされるとよい。
- ・私が校長をしているときの中学校の修学旅行はパッケージから選べる旅行だったが、選ぶ地域の問題点がどの教科のどの単元に関係があるのかを説明したら、先生方にとっても喜ばれた。
- ・修学旅行の目的が、教育目的として大切なのだという意識が、保護者の中に欠落してきているのではないか。修学旅行に対する、学校・保護者・生徒の認識について、未来の教室などで観光教育に参加されたところとそうでないところでギャップがあると感じる。
- ・観光事業者の社員であっても、昨今の新入社員の世代の肌感覚としては、皆、口をそろえて修学旅行がなくなると言っている。それを不思議に思うが、時代の空気感かもしれない。人によって温度差はあると思うが、世代が変わり保護者が修学旅行をそれほど重要視しないというか、世の中の大きな感覚の中で、修学旅行の重要性の占める割合を考えると、質量が軽くなっているのは間違いない。
- ・500人でいく大型の修学旅行は、いまや瓦解をしており、1つのコースは60~80人していることもある。旅行内容も個別選択で、団体行動の見本という昔の就学旅行の感じは、薄らいできている印象がある。
- ・個別最適が教育界に浸透してきていて、その方向にベクトルが向いてくると、300~500人単位の団体行動が必要なのか、枕投げをすることにどれだけの意味や価値があるかという話にはなってしまう、そういう時代の入り口に入っている感じもする。
- ・修学旅行は全員参加必修にしていない学校もある。旅行をやるからには、出かけたことに対する意義を何らかの形で見出していこうと考えると、どうしても個別に、それぞれの目的にあわせて分散していくことになる。また、飛行機がどんどん小さくなってきていて、団体旅行をしづらくなってきていることもある。
- ・修学旅行が、教育現場での教員の授業の枠組みの感覚で語られているかもしれない。「修学旅行を学習指導要領に位置づけてこうやる」という意識が現場に浸透しており、修学旅行でこれを学ばなければならぬと縛られている印象もある。勿論、目的なく旅して遊ぼうでは目的が達成できない。
- ・修学旅行では、事前事後の学習も含めて科目との整合性等を意識するあまり、緻密にしすぎている印象を全体的に感じるとともに、視野を広く持つ部分を縛りかねない。
- ・観光教育の意義・目的は、教科書的なものを学ぼうとしているわけではなく、肌感覚として生徒がどこかに出かけることによって、何かを学び、それがきっかけとして、これからにつながるということを、教員ももっと共有しなければいけないし、保護者も理解が必要。
- ・修学旅行において全てを学ぼうとは考えず、自分たちの発想の中では考えなかったような旅を学校が提供するような、そういったものを実施すれば、もう少し学校の中で旅ができると思われる。そもそも、修学旅行という呼び方自体も変える必要があるかもしれない。

## 6. 普及方策

(※別紙:「事前にいただいた意見」も要参照)

### ■領域 A:「周知」に関する取り組みについて

#### <周知に関する総論>

- ・観光教育は学校によって臨み方に違いがあって良い。
- ・観光教育と言っても戸惑う先生が多く、何をしたら良いのかという声を聞く。
- ・広く普及するにあたっては、学校へ難しいことを言いすぎているのではないかと思っている。こちらがもっと目線を下げていって、やさしく語り、楽しくやることがすごく大事なことではないか。

- ・授業を通した子どもの変容などを見て、ここ数年で学校にも受け入れられるようになってきた。
- ・観光教育を実施している学校でも、観光を理解している先生が半数に満たない状況は往々にしてある。子どもの資格取得の科目を推進したい先生も当然存在。学校全体の観光教育における理解醸成が重要。
- ・個別の教員が興味を持って、管理職が理解できていないと違う力学で動いてしまう。
- ・高校における学校数としては、高校普通科が最も多いが、取り組み事例が報告される機会が少ないのが悩み。普通科に対して観光を伝えていく方法は今後の課題。
- ・先生が様々な情報を持っていないと、授業のネタを作れないため、観光庁の先導で教員の引き出しを増やせるような場があるとありがたい。

#### <観光に関する誤った印象・前提知識の払拭>

- ・観光教育は非常に応用が利く。この認識を、学校教育や先生方に知ってもらうことが、観光教育の理解を深めることにつながる。
- ・イギリスやフランスの教科書には外国に旅をするという内容が教科書にあるのに対し、日本は掲載がない。旅行は遊びだから教育ではないと捉えられる印象もあるが、払拭する必要がある。
- ・普通科の場合は、もしかすると職業教育の側面をあまり持ち出さない方がいいかもしれない。
- ・観光というと代理店のイメージが強い。観光分野は広すぎて知識が少ないため、企業や大学教員など様々な人の協力のもと、どのような仕事があるのかを話してもらうことが重要。自校では、県や市の観光部局の方や旅行会社の方に協力いただいているおかげで、観光教育に取り組んでいる。
- ・6次産業化を含めて、観光は様々な背景にある産業に関わっているため、観光が衰える地域は衰退していくということを学校の先生に知っていただく必要もあるか。

#### <観光教育の全体像の見える化>

- ・小中の教職員は、子どもがどんな枝分かれをしても良いような素材や引き出しを子どもたちに植え付けておく必要性があり、上位の学校がどのようなことを目指すべきなのか、どのようになるのかを知るタイミング・チャンスがあれば良い。
- ・キーワードとしてコンピテンシーという言葉が出たように、何を育てたいのかということと同時に考えていかなければいけない。この学びの体験し、こういう能力を身に付けたい、この段階でこのようなどころまで育つと見える状況が作れるとよい。ネット以外にも知識を得るために最低限必要なものがある。それがどこまでなのかということも含めて、その部分が小学校段階の基礎・基本にもつながってくると思われるので、そのあたりのアバウトな指標ができればよい。
- ・大学での就職実績という出口から攻めて、幅広い分野における観光教育の有用性を示していく必要がある。

#### <既存の学びの見つめ直しというメッセージ>

- ・既に行う教育を見つめ直すと観光につながっていることがある。
- ・現在、既に先生方が取り組んでいる内容と類似したものが多くある。それらの見直しという形が受け入れやすいか。
- ・学びの選択肢を増やすという視点が重要。学校内だけの学びだけではなく、学校外でも学べるようにしたい。生活と学校との学びが分断されているのが普通科高校としての課題。生活圏の中でも学んでいけるような選択肢が、観光教育でも用意されるとよい。
- ・小学1年生から観光教育と類似した学びはやっているため、そこをどう肉付けしていくかを考える必要がある。学校というのは新しい内容を取入れるのは拒否感があるので、それをどう解決していくか



が重要。今ある内容のエッセンスを少し変えていく形にすると良い。例えば、1, 2, 3 年生は遠足があり、遠足は観光教育の 1 つの手段となる。自分の住んでいる場所から他方に足を向けていくのは、観光教育につながるものと思われる。そのあたりをどのようにプラスして、中学年や高学年で広められるかを探っていく必要がある。

- ・ 今後は SDGs が重要なテーマだと思われる。やらなければいけないのに、どうやったらいいかわからないため、観光が一つの事例となり得る。
- ・ SDGs や ICT の視点を含めると、新しい教育テーマとして取り組む動機のある層に観光教育を浸透させることとなる。(船舶でも、自然エネルギー活用や自動運転・プログラミングという要素がある)。
- ・ 観光というのは、1 つの大きな括りにしやすい。キャリア教育の枠組みで小中高大の各年代の子どもと一緒に、観光を通じて学びを行っており、ものすごく成長している肌感覚。

### <学習設計の思想伝達>

- ・ 観光教育の、中身のコンテンツや、生徒の変容なども視点として大事である一方、自己肯定感を育むために教員が生徒とどのように関わればいいのか教員は戸惑うことになる(例：教員の意図する方向へと口出ししないなど)。学校の教員試験でどう動いていったらいいかなど、まだイメージがついていない部分がある。
- ・ 観光教育も含めて、学校が社会とともにやっていくことが必要な時、お互いに尊重して取り組んでいくことが何よりも重要なのだということを地域の方たちに発信する必要がある。

### <周知の場・経路・手法>

- ・ どう発信するか、色んなニュースソースにどれだけ載せて伝えていくかというところが、今後の課題。
- ・ 大きな機運に乗せていく必要があり、そのためには、世間的に、観光教育が盛んに取り組まれているという雰囲気を作ることができるとよい。コンクールのようなイベント(子どもが評価されるイベント)から入っていくのは一つの手段。
- ・ 教員が勉強する機会になかなか参加しないこともある。一般の企業では研修などが組織のプログラムとしてあるが、教員になると強制でない限りなかなか参加しないので、難しい構造となっている。
- ・ 教員の研修受講の一形態として、実際の現場に行く機会があっても良いか。九州の学校では、先生が1年間ホテルに研修に行って、実際に働くという取り組みもあるようだ。
- ・ 教員免許更新時に観光教育に関する指導があるとよい。
- ・ 自身の大学の授業では教員づくりに取り組んでいるが、他大学での取り組みはほとんどない。しかし、近年、社会科や地理教育の分野では教員づくりが論議になり始めている。米国では、ワシントンで中央研修会を夏に実施し、各州に持ち帰り、州内で展開していく活動があり、こうした活動も必要。
- ・ 生徒に活動をしてもらう際は、教員自身のファシリテーション能力が重要。観光教育は教員自身が教えられるものではないので、探究活動を上手く進めるために観光教育を使うようになると面白い。

### ■領域 B：「教材・コンテンツ」に関する取り組みについて

- ・ (※求められる教材やコンテンツの例は、前掲の議論「5. 求められるプログラム要件」も参照。)

### <学びの運営支援：副読本・資料・コンテンツ、等>

- ・ すべての先生がやってくれる状態を作りたいと考えるにあたり、学習指導要領には書かれていないものの皆がやってくれるようになるにはどうしたらいいか考えると、その1つの方策として、当該地域で広く使われる何かしらの副読本に、観光教育の内容を記載する方法などが挙げられる。
- ・ 副読本があるとよい。

- ・市町村単位、都道府県単位、それぞれで副読本があることが望ましい。
- ・観光教育における教材や資料が不足している意見が、学会にて挙げられた。
- ・自地域の観光資源に関する教材が整備されていると指導を行いやすい。中心的な教科書・教材と、時々の方針やトピックを鑑みた教材を組み合わせる方法もある。
- ・当校では、学校の図書室に観光に関する本がなく、あるとしても日本の図鑑として貸出禁止の扱いとなっている。市内の図書館でも、小学生向けの観光に関する本はほとんどなかった。教師向けも、子ども向けの観光教育に関する本がないため、もっと充実させる必要がある。
- ・観光の最大の教材とは「観光に携わる人」と捉えることもでき、現場の声を伝えることが役に立つ。
- ・GIGA スクール構想を念頭に置いたコンテンツが今後不足することは明らか。
- ・全国標準的な学習については、デジタル教科書をはじめ、子どもたちが理解しやすいコンテンツはある程度提供されている一方、地方では大人向けのものしかなく、子どもたちには意味が全く分からない。また、大人がコンテンツを検索しても、いい情報に辿りつけない現状。そのあたりをハンドリングして、小学生でも辿り着けて理解できるようなコンテンツが、山のように必要。その制作にはお金もかかるため、アイデアとしては、高校生の学習で、小学生に分かるような教材を作るコンテストをすると面白いのではないか。
- ・インターネット環境の整備とも相まって、まず取り込まなければいけないのは、地方の地域理解や観光資源理解に通じる動画コンテンツが圧倒的に不足している。
- ・旅行技術の向上などを見据え、ゲーム感覚で旅行を学べるものがあるとよいか。
- ・商業高校における「観光ビジネス」に関する教材は助かっている一方で、教科書だけでは難しい部分がある。地域・日本・世界について、各種の視点で内容を深められる必要がある。例えば、JTB 総合研究所の観光学基礎というテキストのように、旅の歴史などの記載も含めて、全てが盛り込まれたテキストが必要で、さらに、小中高版がそれぞれあると望ましい。
- ・観光産業は大きく変化するため、それに対応できるコンテンツ作りをしていかなければならない
- ・狭く深く様々なテーマで観光教育をやる必要があるが、学校だけでは限界があるため、例えば、旅行業、宿泊産業などの業界がまとまって、高校のための観光教育みたいなものを作り、配信してくれるのが理想。
- ・教材として、観光教育で手軽に扱える統計データがあると取り組みやすい

#### <学びの設計支援：事例、手引き、指導案、等>

- ・一本の授業として成り立つような、どんな人でもできるテキストがあったら良い。ある程度自由な部分があり、導入の部分で「こういうことを身につけていく」と指示のあるテキストの類に加え、外部（ほかの高校、県外の高校、大学、企業、など）と行き来するパイプ的なプログラムがあるとよい。
- ・教育とは違うところから教材づくりにアプローチすることも含めて検討がなされるとよい。
- ・動画コンテンツ等は、教員たちが作っていくものをいかにシェアしていけるかという仕組みづくりがあれば、動画コンテストや、教員の教材のシェア等、もっと進んでいく時代になるのではないか。
- ・観光庁の観光教育の普及動画は非常によくできていると感じる一方で、典型的だと思ったのが、二人の先生がどういう授業をしようかと議論しているシーンがあり、あれが今までのスタイル。色々あっても、最後は先生方で考えてしまうという世界。そこから一步踏み出す時には、指導案も授業に合わせて思いっきり簡単なものにしようと思っており、その段階では観光業の人たちと教育関係者が一緒にやるような形で、実際に教育として教える場面は先生がやるという構造にすることがポイントとも考えている。
- ・自分が授業をしたらと考えると、魅力を価値という観点で、授業の素材となるようなビデオ教

材が様々なネタで100本ぐらいあって、社会や理科などの既存の授業で組み込んでいきたい。観光の良さや学びの価値は、様々なものに反映されていることも良さだと思われ、観光の授業をするというよりは、「既存の授業で観光を扱えるようなツール（指導案、動画）」があると良い。

- ・「指導案の簡略化」もポイントか。色んな取り組みをする中で、副読本を作ろうとすると厚いものができてしまうので、それをやめようとしている。普通の単元の中に、1~2時間やりたくなるようなマイクロ学習のようなものを開発しようという取り組みを始めており、コンテンツとして90秒程度のビデオクリップを作る場合にはGIGAスクール構想とも関連する。今までは、立派な学習を作るということをやってきて、それが1つのステータスでもあったのですが、それだとやはりしてもらえないので、そうではないやり方もあるのではないかな。
- ・文部科学省からも出ているニューノーマル時代の学習環境整備では、GIGAスクールも入っているのですが、令和6年度からの教科書編集の会議が既に始まっており、大幅にデジタル教科書に移行していく流れになっている。教科書の内容が、ページ数の制限がなくなってくるのではないかな、つまり、学校や先生が取捨選択をして、資料や画像を活用していくといった教科書活用になるのではないかな。
- ・タブレットが広まり動画も活用できるようになっているので、教科書を丁寧に教えるという日本の文化がかなり変わってくるのではないかな
- ・ランドマーク的に、どこに行けばどのような情報を得られるかが分かると良い。
- ・学外関係者から話を聞くことを念頭に、「誰に、どのようなことを話してほしい」ということがパッケージ化されていけば、様々な業界の方との外部連携をお願いしやすくなる。特に、中学校の段階から、職場体験など、観光業とは何かに迫れる場面が増え、学外の観光関係者から話を聞ける機会が生まれる。一方で、教員の想定する子どもたちに話してほしい内容と乖離する個とも考えられる。（例：行政と旅行会社に依頼した場合、行政は自組織の観光行政について、旅行会社は近隣住民をどこに連れていくかについて話していただける一方、ちぐはぐになる懸念もある。）
- ・今は、ネット上にオンライン授業が山ほどある。非常に分かりやすく、非常に面白い。GIGAスクール構想により、どのようなコンテンツが生まれてくるか分からないが、ユーチューバー等を教育にはなじまないものとして排除するのではなくて、むしろ、活躍してもらえば、観光では特にいいのではないかな。
- ・不思議なことに学校を介すと生徒たちは尻込みするところがあるため、自主的に学んでもらえるような仕掛けや仕組みが必要。そうすると、カスタマージャーニー（生徒がどのように観光教育を勉強していくのかの一連の流れ）を作ることも重要。カスタマージャーニーに合わせて、学校の観光教育を動かしていくということもできるかもしれない。学校は二の足踏む場合は、外部の専門機関に担ってもらえば良い。

## ■領域C：「プログラム」に関する取り組みについて

（※求められプログラムの一例は、前掲の議論に統合。）

### <各教科の学習における観光教育の実現>

- ・教科横断的な学びが検討事項という意見が、学会にて挙げられた。
- ・教員のノウハウや、これまでの取り組みから、それぞれがどのようなことをしてきたか教員間でもコミュニケーションを取り、材料を並べてそこから考えてみることもできる。
- ・普通科は専門学科と比較して商品開発などのハードルが高く、また、地域との接点を作りにくい。
- ・高校普通科では、課外活動がメインになっているケースと、教科の中で素材として取り上げているケースがある。授業として継続していく観光教育と、トピックス的にやっていく観光教育がある。
- ・高校生のうちに、地域との関わりを実感して、成長することが大切だという理念は理解してくれる一

方で、各教科の先生は、自分の担当している科目の単元をいかにちゃんと終わらせるかがまずは重要であり、そこを踏み越えてくると拒否反応が出てくる。何が高校普通科の目的か考えると、やはり単元を終わらせて大学に送り出していくということが意識として強い。

- ・2006年頃から総合学習のカリキュラム開発の中で、先生方が観光に関連する教材について熱心に研究等されている印象を持つ。しかし、高校普通科の場合、進学や大学受験が中心となり、総合学習にはあまり熱心ではない印象もある。
- ・「総合的な学習」は有望であるが、学校全体での取り組みとなり、中々コントロールができない。
- ・学校教育の中に入るとしたら総合授業だと思っていたが、観光だからこそ全ての教科に関わることができ、様々な産業ともつながることができる。観光を主で授業を作るのではなくて、各教科の中で観光に関する授業を作ってもらい、そういった授業を集めた全国大会のようなものがあれば、みんなでシェアし合えて良い。
- ・色々な教科において、観光の学びで使えるものをピックアップし、それらをプログラム化する取り組みが必要と考える。
- ・平易的なものでも良いので、学習指導要領通りにやっていれば、観光教育に関連する内容として、ここまでやっている、この部分は始めから話をする必要はない、観光学習でこれとこれは置き換えられるなど、ここでこれを学ぶということが分かるようなものがあると、他の教科や総合学習でも受け入れられやすい。
- ・各教科において、観光とつながるものは何かを探して、それぞれの教科で広げ、全体的に横断的に観光教育ができると、各校の特色も出る。本来であれば、観光をキーワードに様々な教科が横断的にできる。(例：地理や歴史はブラタモリのような発想で学習することで、家庭科であれば地域の物産や駅弁などから学ぶことで観光教育になる。専門学科でも、国内旅行業務取扱管理者の学習を通じて、国内の地理学習、運賃計算、約款や法律などを一体的に学ぶことができる。)
- ・総合学習だと学校全体でコンセンサスを図る必要があるが、教科となると担当教員の意向で、外部の各種教育事業(例：政策アイデアコンテスト)に参加できるため、実施の動機づけにつながりやすい。この面でも、観光庁がイニシアチブを持って取組んでいく必要がある。経産省と内閣府における、地域経済分析システムを教育に普及させる取り組みが先行事例として挙げられる。

#### <修学旅行や遠足などの捉えなおし>

- ・修学旅行は観光教育を支える重要な実施体験の時間。修学旅行の在り方が変質しつつあり、SDGsと絡めて修学旅行に観光教育の視点を取り入れていくことができる。
- ・旅行会社の提供する修学旅行は画一化されたものも多く、修学旅行の在り方が、今問われているのは事実。
- ・修学旅行などで楽しかったという経験は心に残り、次に生きる気がする。学習に直接結びつきにくいので、教育で理解されづらいかもしれないが、行ってみたい、知ってみたいという意味は貴重で、いかにトータルな学びとしてとらえられるかが重要。
- ・学校教育で既にあるものを上手く使う意味では、GIGAスクールなどトレンドをおさえるのは上手なやり方であるが、遠足や修学旅行などについても、どう意味あるものに変化させるかということでは「古くて新しい」を意識する必要がある。学校現場では遠足や修学旅行は、過去から続いている単なる行事のイメージしかないところが多く、そこに意味を持たせる必要性がある。ただ近くに出向いて、こんなところがあるね、楽しかったねというのも、観光教育の一つのポイントになるが、それだけで子どもたちは、何か感じ取ったのか、学び取ったのかといえば、そうではない気がする。そこに行くためには、それなりの準備が必要で、私たちがどのように感じて、子どもたちに何を感じさせたいの

かを抑える必要がある。

- ・徳島県に「そらの郷」という体験型の修学旅行の受け入れなどを行う団体がある。これに、東京の神学校が参加し、都会の子どもと田舎の子どもが交流しながら、社会課題解決型の修学旅行を実施されており、非常に面白い事例。このような事例が、広がっていくと良い。

#### <縦・横の連携や連動を確立>

- ・観光に関わる科目を学んだ生徒を、どのように社会に輩出していくか検討が必要。こんな生徒を育てたい、だからこんなカリキュラムが必要で、それを実現するために必要なモデル授業とは何かと検討・提示していくことが必要。
- ・普通高校の生徒でも問題提起は結構できる資質を持つ。文献調査にプラスしてリアルな場や、現地に行ってみるなどが資質・能力を高めるため、その場を作っていくことが重要。
- ・観光関連産業と教育界を結びつけるという水平的な横のつながりに加えて、学齢の異なる子ども同士が縦に垂直につながる観光題材としてのパイプもやり始めないと、観光教育における発達段階に伴って育てていくという視点は、十分ではなくなると感じる。領域と系統（スコープとシーケンス）として、縦軸と横軸の両方を常に考える必要がある。
- ・教員が持っていない機能を社会が持つ時に、学校＋社会の組み合わせの中で、育みたいコンピテンシーを達成することができる仕組みをつくることが重要。
- ・国内旅行の資格は年に1回しか受験の機会がないため、高校生が複数回受験できるようになれば観光に興味・関心を持ってもらえる

#### ■領域 D：「ネットワーク」に関する取り組みについて

##### <指導側の体制・ネットワーク>

- ・ネットワーク作りについては、まずプラットフォームを整備してもらうことが重要。それができれば、人的、教材的なものも一括で相談・連携できる体制が作れる。
- ・先生の育成の観点からは、先生自身がやりやすいようにしてあげるのが一番大事ではないか。いろいろな先生が参加して実践できるようなシステムを作っていけたら、その結果として生徒たち、子どもたちにつながっていくだろう。
- ・大会を開催する時など、1つの教科の部会が入ってしまうと、他の教科の先生が入りづらくなったり、他の教科の先生に連絡がいかなくなる問題が出てくる。
- ・研究会などでは、教科や高校という括りだけではなく、大学や観光関連企業、団体も参加できるような集まりにできると望ましい。
- ・観光教育に取り組む各組織（例：観光教育の教員の集まり）との連携や、意見交換をする機会を設ける視点が重要。
- ・学会などでも、高校の先生にも参加していただきたいが、大学教員のように研究費などがなくて参加できない現状がある。
- ・「観光庁のホームページ」も2年、3年と取り組みを継続し、内容を充実させていけると良い。
- ・オンラインが使えるようになってきたことで、全国の先生が一斉に集まって行うことができる、研修会、勉強会のようなものを、頻繁にやるということも1つのアイデア。
- ・自宅に帰らないと Zoom ができない先生もたくさんおり、リアルな研修会をいくつかの地域で行うのもよい。
- ・産学官の連携によって、子どもが中心となるシンクタンクを地域レベルで設立できないか。そのハブとなるのが各地の商業高校と思われる。商業高校の観光ビジネスを学んだ学生が横串を指すような役

割を担い、専門学科の生徒が中心となって参加するシンクタンクがあるとよい。

- ・観光教育における学びにおいても、「よそのもの・わかもの・ばかもの」と称されるような方の大胆で柔軟な発想や、地元の人が気づかない示唆をとりこみたいところ。
- ・地域の指導者を学校の中に入れてより深い学びを提供するためには、教員の理解を得て、受け入れ態勢を作ることが大きな課題。観光教育以外でも、色んな方の手を借り進めていく必要があり、教員に研修等を行い理解してもらうことが必要。
- ・特定教員の関与・尽力が終わった途端に、活動が途切れるものがある。活動の継続性を確保する仕組みなどを検討・共有する必要がある。
- ・観光教育の取り組みを頑張っているが、今はマンネリ化していて、活動も一部の先生に限られているという課題もある。そのため、他の先生たちが手伝ってくれるかということが一番心配なところ
- ・教員がインターンシップをする機会は少なく、教員が観光の現場を知ることによってどういった着眼点を持つべきかを学ぶ機会も必要。
- ・専門学科は社会とつながれるような活動の体制がシステム化されていて、地元の商工会や組合を通じてなどして、そこも組織化されているので対応してくれる。しかし、普通科の場合は地域が対応してくれるのが精一杯で、生徒の社会連携を受けれる仕組みがあまり出来ていない。地元と交わるときだけでなく、就学旅行など遠方の社会にかかわるときでも同じことが言える。
- ・着地した先で、一体どんな受け入れや交流が待っているかということのを重要視して、着地の地域の方々との交流や、社会に近づくとか、開かれた社会を見せるといったこと等、平和学習みたいなものを含めて一生懸命やることに学校側に賛同いただいております、旅行先でも地域が協力してくれて色んな体験を与えてくれる方向性は正しいと思われる。

#### <学び手の体制・ネットワーク>

- ・観光を学ぶ仲間が集まる機会があまりない。これが実現した時、生徒たちも盛り上がり、いいディスカッションができた。
- ・横のつながりは非常に重要。以前、工業・商業・農業・演劇の4学科がある高校におり、そこでの取り組みの幅に可能性を感じていた。仮にモデル校を選定するとなった場合、そういった高校で取り組むと面白いのではないかと。
- ・異なる属性を持つ子ども同士での学びも有意義。男子校と女子高で思考や行動に違いがみられる状況下、男女混合でグループワークをしたらよい教育効果（恐れない等）が生まれた。

#### ■領域 E：「実施体制」に関する取り組みについて

##### <全体的な動きのグランドデザイン>

- ・何年間でどう具体的などころに持っていかかが重要。社会的なトピック（例：2025年の万博）も気にしつつ、スケジュールを設定する方法もある。

##### <指導者の活動インセンティブ創出>

- ・観光教育を教える先生には、普段の科目に加え、プラスアルファで実践的なことへと取り組むために非常にパワーが必要で、サポートが必要。
- ・教員のモチベーションの維持も課題。
- ・学んだことを観光庁等が証明（ディプロマ）してくれると、大学、社会に出るときの評価書に書けるため、社会連携も進むのではないかと。
- ・良い取り組みの持続性や継続性に課題があると考えており、続かない理由を明らかにする必要がある。

観光教育が教育の素材として持続する仕組みは検討事項。

- ・「〇〇教育」の類は特定の先生がいなくなってしまうと、廃れていく傾向があり、どこまで持続させられるのかの視点が必要。
- ・現在、熱心に観光教育に取り組む方々は、自腹で個人参加している方も多し。学校として観光教育に取り組んでいるイメージを校長が持つことも課題。
- ・校内連携の視点が求められるという視点が、学会にて挙げられた。
- ・授業として取り組むにあたり、観光学習をやるから地域学習をなくすということではなく、今ある授業に加えてということになる。地域学習で地域特性を学んでいるのであれば、同じことを観光学習で繰り返すことはなく、他の授業と重複しないように先生同士で共有する仕組みやシステムを構築する必要がある。
- ・中学校から高校にかけて教科分岐していくとき、どう観光教育が他教科とリンクするのかが重要な問題。授業の進捗度合いの調整は学校内で情報収集して対応する方法もあるかもしれないが、前提として、学校内のコンセンサスを図るために、教員間、少なくとも副校長の理解が重要。
- ・社会協働をする際、外部の人間が学校の立場を尊重できる必要がある。例えば、出前授業が悪いわけではないが、それだけではダメで、やはり、先生たちが教えられるようになることが一番。先生たちが何を知りたいのか、どうしたいのかについて配慮する必要があり、先生たちの信用を得たことにより、先生たちがのびのびとやれるようになる。
- ・学科を超えたつながりができるのは非常に良いこと。
- ・観光教育に関わる中で、観光に対して高い関心をもってお互いに努力しこんなこともしているのだというつながりが本当に素晴らしいと思っており、自分以外にも色々な取り組みがあることが心強い。

#### <活動資源の確保、他事業との連動>

- ・人・モノ・金の3要素をどう揃えて進めるか検討が必要。
- ・観光教育は、やはり経費が発生するため、サポートが必要となる。お金をかけずに「楽しむ」こともあるが、「楽しむ」ためにはどうしてもお金が必要であり、研究モデル校として助成金などがあると、学校としては取り組みやすい
- ・観光ボランティアを県の補助を利用して実施している。取り組みの当初は、生徒の拝観料は全て学校持ちだった。当時、使える予算があったらと考えると、取り組みのハードルが下がっていただろう。
- ・取り組みを展開するにあたり、資金が重要な場合も、人のつながりが重要な場合もある。各種の施策を有機的にどう結びつけるかが大きな課題。
- ・教員だけで観光を教えるのは難しい場合もある。教員が新たな教育に取り組む際に難しいのは、観光協会や地元の観光施設といった、他団体との連携を構築することのサポートがあると、観光教育が推進されるか。
- ・商工会などは、学校に対して遠慮がちにはなるが、つながりたいという要望があることが分かった。
- ・最も重要なのは「観光協会や商工観光課」と「教育委員会」の連携。観光協会の方には、子どもが観光を学ぶモチベーションの維持・向上のために頑張っていたきたい。子どもたちを動かしていく上での何らかの推進費用、教員のファシリテーション能力も鍵なので、教育委員会の頑張るところか。
- ・徳島県では、今年度観光教育の会議が立ち上がっており、県の観光課が主導しつつDMOも参加している。教育委員会ではなく、県の観光部署が行っており、学校の先生や大学の先生も招聘され、学びの仕組みを作ろうと取り組んでいる。
- ・教員は、人、モノ、金に関しては、文科省から支援を受けている。観光については観光庁が所管のなか、どう横の連携を図るか具体化していくとよい。

- ・県の留学支援制度を活用する視点が必要。
- ・国の中核人材養成事業と連携する視点が必要。
- ・マイスタースクール（次世代地域産業人材育成事業）（※SPH（スーパープロフェッショナルハイスクール）の後継的事业）と連携する視点が必要。
- ・SPH事業などに取り組むことで、様々な人脈ができることも重要な視点。
- ・観光版のSPH事業があることが望ましい。
- ・民間主導の地域活性化プログラムと連携する視点が必要。
- ・「環境モデル都市」、「SDGs未来都市」に選定される中で、持続可能な街づくりの実践として管区教育を行ってきた。
- ・「財団による補助」を受けながら実施することもある。
- ・学外の関係者（社会）が教育に関わろうとする際、教育分野では補助をする予算がないため、他の分野における補助などを活用しながら、社会の関与を図っていく視点も必要。
- ・札幌市では、雪対策に関する事業とも関連させて、観光教育を行っていた。
- ・中部電力の補助金研究費を受けながら観光シンポジウムや日本地理教育学会での発表や観光教育推進について検討してきた。
- ・内閣府の地方創生に関する、RESAS（地域経済分析システム）データ活用や政策アイデアコンテストの枠組みにおいて、地域課題の解決学習として観光教育を実施することができる。
- ・観光産業や研究を行っている大学やまちづくり団体と連携し、教科学習の課題として、また、専門性を持った教育テーマとして深めていくためには、観光産業の人材や、観光の研究を行っている大学やまちづくり団体との連携が実現できるとよい。
- ・民間主導の地域活性化プログラムと連携する視点は重要。教育委員会は絡んでいませんが、長野県の湯田中温泉で八十二銀行が実施している「WAKUWAKU やまのうち」という地域活性化プログラムがあり、温泉街の再興をしている。その中で、小中学生に温泉街について学んでもらう授業を実施しており、通学路の旅館と子どもの交流が出来ている。新しい事業を始める人が小中学生と交流を持つことが、自分たちの町のビジネスとは何なのかを考える機会になっている意味で好事例。
- ・過疎・少子高齢化で悩む地方などは観光が地域活性化の起爆剤。そのためにどのように地域人材を育てるか、地域間で連携して盛り上げるにはどうすればよいかを考えられる子どもを誰が育成するのかという点にクローズアップすべき。
- ・民間の観光事業者には、旅行サービスの提供で培われた、知見、経験則を元に、体験学習や探究学習のソリューションを展開するインセンティブを持つところもある。
- ・民間の観光関連事業者が課題を提示する探究学習づくりも重要。
- ・観光協会などの観光組織（DMO等も含む）が、観光教育のプログラムを高等学校に販売する手法も考えられる。（例：ユネスコエコパークである志賀高原）
- ・地方における就職事情としては、地元の有力企業に就職したい風潮があると思われる。業界や職業に対するイメージは職業選択に影響を与える意味で、取り組みの議論余地が存在。
- ・特定の業界・業種・職種に関する課題に対して、対応策の基本計画が策定され、産学官連携で対応しており（例：船員不足）、そこに観光教育が解決ツールとして含まれる。

## ■領域横断の取り組み

### <モデル事例の整理・創出>

- ・小中高と探究的な時間が増えるとはいえ、学校現場は仕事で追い詰められており、なかなか新しいことに取り組みにくい状況。観光でなければいけないという縛りはないため、巻き込みたい想いはある



ものの、スムーズにはいかない状況もある。そのため、「モデル事例を出して、面白そうで効果がある」と見せる必要がある。

- 学校の管理職に対してもアプローチできるよう、インセンティブ選べるモデル事業のような形を観光庁で検討し、大きな商業高校や学校で管理職を巻き込んで行う動きが全国に広がれば、裾野も広がる。
- 年間いくらかの補助が伴うモデル校事業を作りたい。旅費も学校で中々出ない。発表どこの名目で子供を集めていただく方法がある。そこで情報交換をしたり、観光教育について学ぶような動きもあってよいのではと感じました。
- モデル事例としては、「突出した尖った事例」と「どこでもできる普及型の事例」の2種類をきちんと示すことが必要。頑張ればこのようなこともできるという事例と、今すぐにできる事例を示すことで、指導者を育成する土壌を作っていく。観光庁で文科省を巻き込んでもらい、続いて各県の教育委員会が巻き込まれていけば、大きく普及していく印象。その中で例えば、中心的な普及をすところに対しては事業化や補助金などを含めてサポートがなされると、強制的に前に進めていくことができる。
- 観光教育に取り組んでいる事例を見ると、コースや類型で実施しているところが多い。コースや類型の単位でまとまった予算をかけて事例を採っていくと、少ない人数で負担になってしまう懸念がある。そのため、2~3校が集まる形で指定をかけ、まとめて予算にして動かすとよいか。取り組みの違いが分かって興味深いうえに、子どもたちにとってもまたやりたい、こういうことを知りたいと思ってもらうきっかけになるのではないか。
- 専門学科で育まれたカリキュラムを基軸に、普通科やほかの学科へ展開する経路もある。

#### <情報や知見を共有できる仕組みづくり（アドバイザー制度、プラットフォーム、等）>

- 様々な先生の間で情報共有する機会の中で、コンテンツやツール、つながりを作る仕組みができれば良い。Zoom など新たな仕組みもどんどん取り入れつつ、リアルでも色々な方々との交流や、他の学校（小中高大）の先生と話す機会が増えれば、様々な課題が解決されていくと感じる。
- 小中高が縦につながるような議論の場をどう継続していけるのかは重要な視点。
- 小中学校の学習指導要領では観光についての話が見えにくく、授業では観光を扱ってもらいにくい状況。どうしたら学校教育に入れられるのか考えながら実施してきたものの、結局は、地域の中のボランティアでやっていたことを、子ども観光大使の事業では発表していた。6年継続していたが、予算の関係で終了となっている。国語でやったことを国語で、社会でやったことを社会で、家庭科でやったことを家庭科で発表するのであれば、各学校で導入しやすい。観光庁が主催で全国大会を開催すれば、教員は授業も見られるし、子どもたちも発表できる。各教科で分科会もできるとよい。
- 観光教育の実践経験を広められるような、「助けの場となるプラットフォーム」の必要性はかねがね考えている。どこに相談したら良いのかなど、答えを返してくれる場所があると良い。
- やりたいけれどやることができない、まだ学びたいという先生方が、観光に関してはたくさんいると思う。「教員が学べるような場」や、経験のある先生がほかの先生方へと教材やプログラムなどについてアドバイスできる、「アドバイザー制度」のような仕組みづくりができると、後々広げていくために、とても有効。
- 特に商業高校などでは、これから観光教育がビジネスで始まるので、まちづくりアドバイザーなど、様々な制度が各自自治体にあるので、そうしたところも視野に入れ、広く「小中高の観光教育を推進するためのサポートシステム」について、一定の有識者や経験者がいて、地域ごとにサポートできることが望ましい。
- SPHのように学校に完全な裁量がある事業など、「既存事業の取り組み内容を観光教育の視点で整理」すると、観光に特化したSPHの事例として抽出・紹介できる。そこに、「モニタリングやチェックな

どのサポートを、業界や観光教育の実践者を巻き込んで実施」できるとよい。

- ・いろいろな事例が各学校にたくさんあると思うが、共有できる場所がないことが課題。自分のまちはSDGs 未来都市に認定されており、修学旅行に来る人が多く、自然に集ることができ、情報交換が盛んに行われるチャンスがあるとも捉えられる。
- ・まずは学校の先生に観光教育の一端を知ってもらい、見てもらう機会を作り、ネットワークを広げていくことも重要。観光教育の経験のある先生に、授業をやっていただく機会を設けるにあたり、今はWeb 会議ツールで中継することもできる。高校生同士でも、教員同士でも、ネットワークを広げていくことが必要。
- ・観光教育を始めるにあたり、観光教育研究会から学んだことが多かったので、そうした研究会へとアクセスしやすくする取り組みが求められるとともに、参加したことを効果的にしていくことが重要。今あるものを持続的に動かしていくことも有効な手立てとなりうる。
- ・「アイデアを共有する場」があり、それが「データベース化される機能」があると嬉しい。そこを見ることで、何らかの情報・ヒントを得られると、先生たちの引き出しになる。引き出しの多さが、生徒たちの興味関心に繋がっていく。見る（求めている）人は多いが、書き込む人が少なくなる可能性もあり、どのようにデータベースを構築していくかが重要

#### <評価視点・評価方法の確立による指針設定>

- ・プログラム・モデルを作ることは大事である一方、どの能力を伸ばしていくかを明示する必要がある。
- ・どういう生徒をどう育てたいということを決めるのが先であり、それを実現するモデル校的なものを作ってみて、モデルとして回すとどうなったか、こういうカリキュラムだと効果があるということが、何年後かの段階で入ってくるとよい。
- ・教材ツールの観点では、評価をどのように一体化させるか、コンピテンシー評価も各学校で必要だと思うが、それに向かってルーブリック含めどのような評価ルールを作っていくか、この学びをするとこのような資質が成長するということをきちんと示すようなものが必要ではないか。

#### <観光を学びたい子どもを増やす視点>

- ・観光教育を学びたい生徒を増やす視点も重要。学校紹介の場などに、観光庁関係の発信力ある人に来ていただくことや、専門家と普通科が協力して観光教育について宣伝することも考えられる。参加ハードルの低い Web 会議ツールの活用も重要。
- ・最終的には生徒がいかにもそこに入ってきてくれるか、どういう生徒を育てられるかが、学校現場の先生方にとっては重要。生徒たちと地域との関わりが見いだせるような、例えば、地域や現場と生徒たちが活動して共有できる場も作るなど、色々な機会を観光庁として創出していき、学校と教育現場が、観光教育を魅力的なものとして受け止めて、広げていけるとよい。

#### <イベント、コンクールの活用>

- ・観光系のイベント（例：観光サミット）について、文部科学省が後援になっていないために、先生の出張が難しいこともある。後援等の要件整理が必要。
- ・観光アイデアや、観光関連作品などについて、発表の場や表彰の場が設けられることが重要。
- ・大会・コンクールは、小中学校だけでなく、高校でもモチベーションに貢献する。例えば、自校では、経済産業省中小企業庁のビジネスコンクールにおける「地域を探る」部門に参加している。周りの人に知ってもらえるきっかけにもなるので、観光庁でもこのようなコンクールがあると面白い。

- ・学校の先生方が興味示してくれなくても、興味を持っている高校生がたくさんいて、学校を介さなくて良いなら関わってみたい、やってみたいという学生が結構多いということが分かった。学校を介さなくても良いということであれば、様々な学校で教材を作って、生徒たちが自由に見ることができ、生徒間の関わりから学校間の関わりにもつながる。そのひとつとして、観光学習のキャンプのようなものがあったとしても良いのではないか。(高校生向けの政策のアイデアコンテストで、当初、窓口が学校だったので参加生徒が少なかったが、今年はコロナでやむを得ず、学生が直接応募する形にしたら応募数が倍に増えた。)
- ・大会などの事業は、学校行事のスケジュールを鑑みて開催いただきたい。

#### <観光ビジネスの枠の活用>

- ・観光ビジネスの導入は非常に大きなチャンスであり、これを逃さない施策が求められる。商業教育に限らないが、今後、各種のカリキュラムが出来たあと、それを観光庁として、具体的に地域と結んだプログラムにどう展開していけるのか見当が求められる。

#### <各行政の取組連動>

- ・教科書へと観光産業とは何か、具体的な記載がそろそろなされても良いか。
- ・小中高にどう落とし込んでいくかについては、学習指導要領にどう落とし込むかが重要。沖縄の海洋学習の例を挙げると、海洋基本法に基づいて各自治体で海洋基本計画が策定されており、そこから学習指導要領に落とし込まれているため、教員としては取組まざるを得ない状況であるがゆえに、取組みやすい状況となっている。また、現在小中にも海洋学習の内容が組み込まれており、連携しやすい環境となってきた。
- ・「総合的な学習」に関して、市町村教育委員会毎の教育課程編成権限（指導権限のようなもの）を明記してもよいか。
- ・社会科において、「人口減少問題×地方創生」と関連して、「観光単元」を作ることが検討なされてもよいか。これは、市町村単位で策定される標準カリキュラムのレベルで対応することも重要。
- ・「学習指導要領+標準カリキュラム+教材」がそろそろと、強力に推し進めることができる。その前段の準備として、例えば、研究授業を重ね、その研究授業を原型に教育課程編成の手引に反映させることを、校長、教員、教育委員会の指導主事、行政（例：商工観光課）がチームを組んで検討する方法が挙げられる。
- ・経産省の未来の教室における巻き込み方は上手。EdTech と STEAM が GIGA スクールに直結している。GIGA スクールで整備をして、その中身を STEAM 教育で広めていく構図。STEAM 教育は多くの県の教育大綱の中で謳われており、そこに観光教育も入るイメージになると、教育委員会としてもこれは PR していく取組みの一環だという認識になる。実際に、複数の自治体では教育計画の中身の改革をしており、来年度は何校、再来年度は何校と広めていく計画を教育委員会として立てており、そのようなやり方をすれば確実に広まるという印象を持つ。

以上